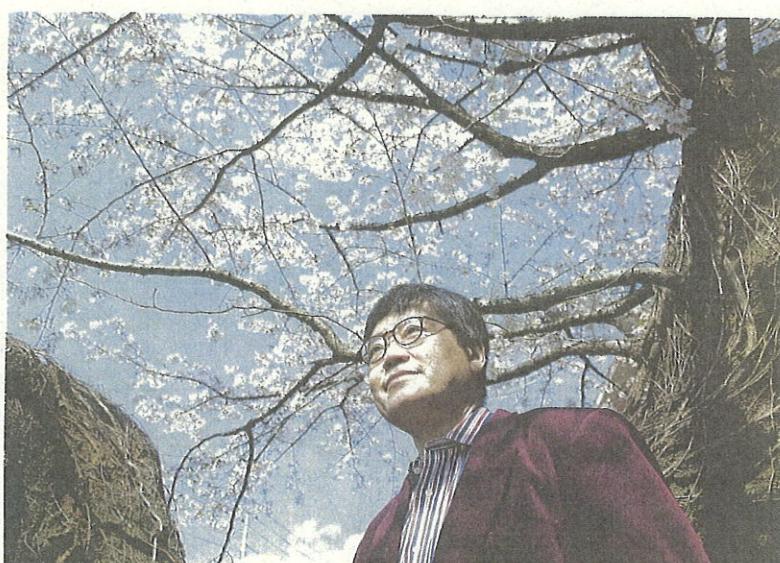


読書日記

理工系の大学で教わるようになつて二十年になる。「何で東工大に?」と昔はよく聞かれたけれど、そもそも科学も技術も文化と人類には大いに関係している。ぼく自身が大学入學時は理系だし、そんなに妙なことでもない。さらに大学改革で新入生から博士課程までベラルアーツが必修科目となり、新入生自分が東工大立志プロジェクトに参加し、三年生では学生全員が「教養卒論」を書くという大胆なカリキュラムへと変身し、気がつけばこの大学教育のひとつ柱を担うことになってしまった。

本を読むときも、自分にとつての面白さと「これは学生に書くだろうか?」「先生自らが混在してしまうのはちょっと複雑な気分になるけれど、学生が喜んで本を読まなくなつた昨今の状況では、香氣なことは言つていられない。その中でのこの一冊、「パブロフの犬」と言えば誰でも知っている心理学における条件反射の理論だけれど、そんな心理学の代表的な実験を十九世紀から二十世紀まで五十選んで紹介したのがこの本だ。各実験が二~四つで美しい挙げやすい。



心理学の代表的な実験

場。「え、進化論と心理学?」と思うと「何と?」「ミズに知能はあるのか?」。実はダーウィンは一八三七年以來四十一年間にわたつて自然でミズを観察を行つた。ミズ研究家だった。ミズは自ら掘つたトンネルに落ち葉の尖つた端をつかんで引き込む。なぜならミズはある程度の知能を示しているという。結論は避けがたい」と結論づける。うーん、やっぱりダーウィン、ただものではない。

今週の筆者は
上田紀行さん

*3月21日~4月17日



■パブロフの犬 実験でたどる心理学の歴史 (アダム・ハート・ダイヴィス著、山崎正浩訳・2016年 創元社・1944円) 心理学の重要な50の実験を紹介、その歴史をたどるとともに、自己理解の手助けにもなる一冊。

教師役の被験者が、学生がどんな苦しみの声をあげてもシヨック量を最大限まで上げてしまつという、ミルグラムの有名な実験どももちろん入つてゐる。後から見ればまとも見えるが、よくもまあこんな実験を次々と考へつくものだと感嘆させられる。

その中で気になつたのは、「報酬」をめぐつての二つの実験だ。被験者に課題を与えて最後まで終えたグループと途中で中止させられたグループで課題についての記憶をチェックすると、中止させられたグループのほうが格段に課題示して金賞に賞状を与えたグループ、絵を描く前には何も言わず描いた後に金賞に賞状を与えたグループ、何も与えなかつたグループの子どもたちだけがその後に絵を描く関心を低下させたという。「賞状がもらえるから」というう最初の動機付けが逆にお絵描きに対する内発的な興味を失わせたのだ。

大學もそうですね。「単位が取ればいいや」という報酬は西刀の剣だ。そもそも大學入學時は「単位」や「テスト」に条件付けされたパブロフの犬だった。そこを脱して人間としての「志」を育もうという大学ぐるみの改革、それも実は社会的な一大実験になるのだろう。

讀書日記

さてそこで「仏教3・0」である。さすがに「仏教」にバージョン番号とは一瞬ギョッピングする人も多いのではないのか。「けしからん！」と怒り出す人もいそうだ。逆に「田本の仏教なんてもうバージョンアップなんて無理」と冷ややかに反応する人も多いかも知れない。

著者の二人、藤田一照さんと山下良道さんはお坊さんだ。でも二人ともお寺の出身ではなく、20代で人生の大き



■ 東京都目黒区で、中村藍撮影

うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ 研究教育
長。著書に「ダライ・ラマ
の対話」「生きる意味」ほか

お駄駄さまから今ここまで、絶え間ないバージョンアップこそが仏教の本質なのかもしれない。

さてそこで「仏教3・0」である。さすがに「仏教」にバージョン番号とは一瞬ギョットとする人も多いのではないでか。「けしからん!」と怒り

情幸社会の流れに沿って、
社会だとう。ドイツの推し
進める「インダストリ-4.
0」の先を行きたいという願
望も透けて見えるネーミング
だけれど。

例えば日本の最新の科学技術基本計画の目標とする社会が「Society 5・0」だということをご存知だろうか。全てのモノをインターネットにつなぐ「I・O・T」などを駆使した「超スマート社会」がそれで、狩猟・農耕・工業・書籍社会の次に来る「S・0」

—△△2・0—とか—××

3・0」といった言葉をよく聞くことになつて、どのくらいの日月が経つのだろ。最初はもちろんWindowsとかmacOSのようなコンピューターのOS（オペレーティングシステム）だった。しかししそれが急激に一般用語にも波及してきている。

な間に正面して出来
座禅道場で厳しい修業
後アメリカに渡り藤田
20年弱滞在、山下さん
リカの後ミヤンマーへ
この10年は一人とも畠
日本で活動している。
その二人の定義すらも
「1・0」は日本の伝統
形骸化していく、そ

家と同じ
尼をした
田さんは
はアメ
に渡り、
帝国して
病院はたくさんあってもそこ
での医療を誰も信じてない状
態だという。うーん、厳しい。
しかし多くの日本人がそう感
じていることは確かだ。

の障壁、そしてアリランカヤの尊貴として使ひてしまい、真の解放には至れないのではないか。そうそう、「マインドフルネス」という言葉の日本上陸でよく感じるのもその感覚に近い。

ならば「仏教3・0」は何とかというと、それはかなり遡る世界にはいっていく。特に遠な世界にはいっていく。特に哲学者永井均さんを交えて、た鼎談はときどき氣が遠くな

たことだ。アメリカ西海岸にある。それはぼく自身を感じてき

仏教のバージョンアッブ

住んでいたときの、周囲の人々の仏教に対する熱い思い。上座部仏教のお坊さんの海外布教での「仏教は勝利する!」といった力強い言葉。しかし一方でそこに何か大きな違和感も感じてきた。

二人も「仏教2・0」に身を浸し、真摯に実践しながらそこには落とし穴があるとう。瞑想をして自らを見つめ整えるというが、その瞑想をする主体が「自分をコントロールする」という意識を持つたまでは、結局仏教を

るような哲学の世界だ。でもうとほんとうに真剣にトライしている人がいること自体に深く感動してしまう。

思えばぼくが対談させていただいたダライ・ラマ14世も、仏教1・0、2・0、3・0を融通無碍に横断していく人だった。「瞑想もいいけど瞑想にとらわれてもダメなんだ。知り合いの高僧たけど瞑想中に他の僧侶が物音立てたら烈火のごとく怒って、『いま最高の境地だったのに』つ

の隣盤としてスリランカや
ミャンマーの上部仏教の瞑
想法も世界中に急速に広がり
つつある。そこでは「苦しみ
を救う仏教」が実践されてい
る。病院のスタッフは医学を
信じて病気を本気に治そうと
している。實に感動的な姿で
ある。
それはぼく自身も感じてき
たことだ。アメリカ西海岸に
た鼎談はときどき気が遠くな
らば「仏教3・0」は何
かというと、それはかなり深
遠な世界にはいっていく。特
に哲学者、永井均さんを交え
て、

今週の筆者

化人類学者
上田紀行さ
*4月18

*4月18日～5月15日

〈仏教3.0〉

■「仏教3・0」を哲学する（藤田一照）
下良道著・2016年（春秋社・1944年）
■アップデートする仏教（藤田一照、山下良道著・2013年）
幻冬舎新書・950円

讀書日記

若松さんがこの数年生みながら
してきた著作は、どれも美しく、
ぐれども悲しく、しかしほんと
たちが人生を生き、自分を打
ち震えさせる言葉に出会う喜
びに満ちている。たいへんな
読書家で博識な著者だから、
ぼくたちはそこで多くの「有
名人」の言葉にも出会う。室
沢賢治・シモーヌ・ヴェイユ、
内村鑑三、リルケ、鈴木大拙、
ソクラテス、志村ふくみ、コ
ング、キケロー、太宰治……



むしょうに「言葉」に出会いたくなるときがある。
もちろんぼくたちは毎日言葉を使っていている。朝起きてから夜寝るまで一日中ずっと。
テレビにも、新聞にも言葉が溢れている。ぼくたちは家族にも友人にも、仕事相手にも言葉で語りかけ、また語りかけられる。仕事場で学校で、買い物で、パーティーや宴会で。

だからとっても「物知り」にならぬ。でもそれは幾多の「名言集」にはまつなく違う。世に溢れている「名言集」、それらはいかにも「人生の指南書」のように書店に並んでいる。ビジネス書のコーナーにも置いてある、いかにも「役に立つぞー!」というオーラ

をまとった「名言」たち。
しかしこにはまったく違
った時間が、そして世界の興
行きが広がっている。

差し出すまで待たなくてはならない。むしろ生きるとは、時を費やして人生が導いてくれる言葉の意味を深く感じてみることではないだろうか」（「言葉の贈り物」）

自分がその言葉の深みに達するまで待つ。私の人生の深まりが言葉との出会いを生む。「名言集」の名言はそれが、そして喜びがあったのだ。

「それはせっかくの言葉との出会いを、そして自分自身の人生に流れる豊かな時間を除外してしまう。若松さんの紡ぎ出す言葉、それは「行間」から思いが溢れ出てくる言葉だ。この一行から次の一行に到達するまでに、どれだけの人生の悲しみが、そして喜びがあったのだ

「行間」から溢れ出る言葉

自体に効能がある栄養ドリンクのように売られている。しかしそれは言葉との出会いと言えるのか。

ろう。そのことに気づいたとき、ぼくたちもまた自分の人生の「行間」に誘われるのだ。

撰り入れることを「読むこと」と
だと思い込んでいる(同前)
情報となるだけ多く撰取され
ばパワーが得られる。もち
ろんそういう読書もあるだろ
う。しかし「言葉」をそんな
ものだと思い込んでしまうこ

その若松さんが最近詩集を出した。「見えない涙」というその詩集は、まさに言葉の向こう側の見えないものを語り出し、冒頭からぼくも涙が溢れそうになる。そうか、彼の批評は散文でありながら、最初から詩の世界だったのだ。
ぼくは駅の電光掲示板じゃない、スーパーのラジカセじゃない。言葉を信じよう。語り出そう。言葉よ、言葉に届け、そして心に届け!

筆者

化人類学者

*5月16日～6月12日



■言葉の贈り物（若松英輔著・2016年）
見えない涙（若松英輔著・2017年）
堺紀書房・1620円

読書日記

これを超えるステーキには生涯出会わないかもしない。そう思いつつぼくは肉厚のステーキを頬張っていた。

南米ウルグアイの首都モンテビデオ。ブエノスアイレスからのフェリーを下りてすぐの市場の一画には炭火焼きのレストランが並んでいる。焼き場の目の前のカウンターに座って待つことしばし、炭火の上から運ばれたステーキは、表面は香ばしく、焼き加減も絶妙でナイフを入れれば肉のうまみが溢れ出し、この世のものとは思えなかつた。

世界にもっと美味なステーキがないかと言われれば分からぬ。東京には一枚数万円のステーキだってある。しかしエノスアylesで背後から汚物をかけられ、拭くふりをしてのスリ集団からぼうぼうのいで逃れ、洗濯の間はホテルからも出られず最悪の時を過ごした後に乗り込んだウルグアイで、感じのいい料理人が炭火焼きにした、牧畜国自信に満ちたステーキにナイフを入れていく瞬間は、まさに至福の時間だった。

そんな至福と出会うとき、ぼくたちは生きている——といふ実感に満たされる。ワイン評論家のように全てに点数を付けるためにぼくたちは生きているのではない。そのタイミングで、その場所で出会つ



■ 東京都墨田区の東京工業大学大岡山キャンパスで、中村藍撮影
「ぼくは明日、昨日のきみとデートする」
2014年
100万部突破の大ベストセラー。「ぼく明日」の愛称で親しまれ、2016年公開の映画もヒットした。

文化人類学者
上田紀行さん

*6月13日～7月10日



出会いと別れの切なさの喪失

「ぼくは明日、昨日のきみとデートする」。へんな題名だけど、それがこの恋愛小説の全てを貫いていた核心だ。ベストセラーとはいえネタバレは避けたいので、内容は詳しくは書けないが、ぼくの彼女との出会いが彼女にとってはぼくとの別れの瞬間だったというその切なさが、逆に生きることの切実さを教えてくれる。映画では小松菜奈さんのミステリアスな美しさと衷しみに泣いた。

だけどそんな出会いの切なさはいま失われつつある。そ

うえた・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。著書に『かけがえのない人間』『癒しの時代をひらく』ほか。

筆者は上田紀行、松井幸典、津村詠久子、平田オリザの名氏です。

たワインに、ステーキに感激情、それが人生に意味を与える最高のものとなる。

恋愛も同じだ。全世界の中を見た映画には久々にやられてしまった。機内で見る映画特に日本映画の多くは「出会い」を感じさせない。バランス良く一般受けする映画がどうしてここでこの人と出会いてしまったのか、という不可思議さとありがたさがぼくたちを震撼させるのだ。

南米への移動中に飛行機の中で見た映画には久々にやられてしまった。機内で見る映画特に日本映画の多くは「出会い」を感じさせない。バランス良く一般受けする映画がまだつこしい娘だから、聞いても話が全然分からなかつたのだが、そもそも説明するのが難しい話だったのだ。

は泣きそうになってしまつた。映画の中から、これはぼくの中の娘がこの前読んでいた小説の映画化に違いないと分かった。普段から説明がまだつこしい娘だから、聞いても話が全然分からなかつたのだが、そもそも説明するのが難しい話だったのだ。

してそれが僕たちから切実な生を生きている実感を奪つているのではないか。出会いと別れの切なさの喪失、それはSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サークル)によるコミュニケーションによってぼく自身はウェブ上で永遠に生き続ける。他の人は容易にぼく

を見つけられるし、そして誰かと別れても、インターネット上ではいつまでもつながつていられる。しかしその世界はぼんどうに幸福なのか。四国遍路を研究している上田研究室の大学院生が言つていた。昔は歩き遍路で出会つた人と「会えて嬉しかった!」と感激しながら握手して別れたんですね。でもこの頃は「じゃあフェイスブックでまた」なんですよ。何だかなあ。

出会いと別れが人生だ。そ

う、娘がぼくに小説の感動をもどかしくも伝えようとしたのも初めてで、それが何と恋愛小説で、ぼくが読む初めてのラノベで、しかしその「初めて」はぼくの人生で一回しかない体験で、それは出会いであり別れなのだ。

読書日記

ウェブ上でもう一人の自分が永遠に生き続けるSNS「ソーシャル・ネットワーキング・サービス」は、人生の出会いと別れの切なさと切実な生を生きている実感を奪うのではないか。前回の「読書日記」でそう書いた。

きっかけは南米ウルグアイへの旅とその機内で見た映画だったが、もう一本心に残る映画を観た。「LION/ライオン」25年目の「ただいま」、今年の米アカデミー賞にもノミネートされた、ひとりの少年をめぐる実話だ。

インドの地方都市。母が肉体労働で家計を支え、極貧ながらも愛情深い家庭に育つ5歳の男の子サルーは、兄の仕事についていて駅のベンチで眠り込み、ひとりで自覚めてパニックになり、目の前の回送列車に飛び乗って1500㍍以上離れた大都会カルカッタまで閉じ込められてしまふ。ようやく降りても公用語リートチルドレンとなり、児童売買の手から辛くも連れ、警察に保護され刑務所のようない子どもに襲いかかる悲劇の連続。深夜のホームで兄の名前を必死に呼ぶ姿、母から遠く離れてカルカッタの雑踏をひとりさまよう姿に、心がゆさぶられる。



筆者は
今週の

文化人類学者
上田紀行さん

*7月11日～8月7日

孤児を他国へと養子縁組するNPOの目に留まるところから話は新たな展開になる。

彼はオーストラリアに渡り、愛情深い夫婦の養子となりのびのび育つ。けれど大学に進学し、学生寮でインドの留学生活に出合い、自分の過去と直面する。自分はどこから

来たのか、兄は母はいまどきでどうしているのか?

留学生のひと言が彼を失われた過去の探索へと押し出す。駅の風景や町の風景を覚えてるんだたら、グーグル・アースでその風景を探せばいいよ。遠く離れたオーストラリアからでもインター



■25年目の「ただいま」
「まぶたの母」との再会物語から、「夢をあきらめではない」との著者のメッセージが伝わる。

「まぶたの母」との再会物語から、「夢をあきらめではない」との著者のメッセージが伝わる。

インターネットが活くる時

そして4年後のある日、どう

どうその日が訪れる……。

原作を読んでみた。そこに

は

映画はないアリティ

がある。生地の探索も200

7年

当時の回線速度では遅々

として進まず断念したが、失恋の痛手から転がり込んだ親友の部屋の高速回線で再燃。

しかし次の恋愛が始まつてま

たかまたが、彼女と同棲し

たアパートに高速ADSLを

導入してまた作業が進展し、

と人間的要因とインターネット速度の絡まりが面白い。

「グーグル・アースが起こ

・テレサの教えを受け37年間で2000人の子どもの

養子縁組を世話してきた女性

の生き方にも打たれる。人間的な信念、主人公の自分のル

ーブを探したいという強い思

いと重なり合ったとき、イン

ターネットも活き、ぼくたち

を活かすものとなるのだ。

自分が昔自分からなくな

り、インドの放浪旅行に出でぼくがカルカッタにたどり着いたのは1980年のことだった。ひとりの5歳児が列車中を生き抜いたのはその7年後のことだ。マザー・テレサが、NPO代表の女性が、オーストラリアのご夫婦がいなければ、そしてグーグル・アースがなければ、ぼくは彼に出会っていない。全てに感謝!

筆者は上田紀行、松井孝典、津村記久子、平田オリラマとの対話をほか。

II 東京都墨田区の東京工業大学大岡山キャンパスで、中村藍撮影

「特集ワイド」へご意見、ご感想を t.yukan@mainichi.co.jp ファックス 03-3212-0279

特集ワイド

「早く帰れ」「もっと休め」と政府がどんなに音頭を取つても、「そんなことができるか」とちまたでは陰口ばかり。なぜ日本人は仕事を休もうとしないのか。根底から探つてみると……。

[宇田川恵]

もう7回目になる。月末の金曜は午後3時の退社を保す「アシマムフライデー(フレ金)」が8月25日、再び戻ってきた。4時半過ぎ、東京・銀座を歩いてみる。地面からわき立つ熱気がきつく、連日の仕事疲れもあつてしまつとグラグラし、前の人があつかつてしまつた。免税大手オックスの重そうな紙袋をつも握った中国人だ。銀座は元気あふれる外国人でさつた返す。いつらいフレ金帰りのサラリーマンはどうだ?

「当初は午後3~6時に会社を実際に早く退社する人は限られ、既に『見直すべきだ』との声が飛び交うほど評判の悪いフレ金。これに続き、政府は年末から「ギッタワイヤー」を始めている。学校の休みなど連休を作るうど取り組みが、観光振興につなげることも、親の有給休暇取得を増やす狙いがある。しかし早くも子供と告わせて休みは取れない」など批判が噴出している。

政府から続々届くラブコールに對し、かたくなにもう少し知らない国民。長いバカンスを楽しむフランスや北欧の人から見れば滑稽だろう。なぜ日本人は休みを取らないのか。

育児に積極的に參加する男性「イクメン」を広め、NPO法人「ファーザーリング・ジャパン」を作った安藤哲也さんに聞いてみる。

日本人なぜ休み下手?

華々しくスタートしたフレ金だが今はひっそり……=大阪市北区で2月24日午後3時50分、星月亮一撮影



これが美しいと教育されちゃつるんですよ。『勤賞文化』が大きな問題です。若い頃から休まず働くことが普通だった人が今、管理職にしている。上司が休まないから部下も休めない。ふと遠い昔を思い出した。私も幼稚園で皆勤賞をもらっていたが、园で表彰された。体調が相當悪くても出勤してしまう今自分が何を植え付かれていたのか。安藤さんは「休んでも何をしていいか分からない人が多い」とも話す。企業の管理職は対象としたセミナーで「仕事以外の趣味や仲間をもつてますか」と聞くと、ほぼ手が挙がらないそうだ。

東京工業大学の上田紀行さんは知られる文化人類学者だ。「日本人は、そこにあることが重要なんです。何をするかより、そこにどれだけいるかが価値觀」

くさは、さらに強まつたという。顧客志向の異常な高まりが原因だ。景気が悪い中、企業は値下げなど過剰なサービス競争を開いた。「株主義、従業員志向などと言うが、今、日本で最も強いのは顧客志向です。それが行き過ぎ。負荷は労働者だけにかけるという心がんだ状況が生まれた」。ヤマト運輸の問題が象徴的だ。ネット通販が急増する中、顧客向けに配送料は抑えられた。一方、社員の待遇は改善せず、ドライバーはさばき切れぬ荷物に悲鳴を上げていた。

そもそも休むことはどんな意味があるのか。宗教や愈しにも詳しい上田さんによると、日本人の場合、休むことの意味そのものが確立していない。それが大きな問題だ」と言ふ。

「休暇自体が人生の楽しみだと思つてゐる人が結構いる。休暇自体が人生の楽しみだといふ発想が乏しいんです」。実際、政府がフレ金などをPRする場合、必ず前面に出される状況を作るには何をすべきか。

イクメンの安藤さんは「職場の空気を決める上司が意識を変えるしかない」と言い切る。「休むと評価が下がるような状況は変わるべきだ。文部科学省を中心とした勤賞文化をなくす運動こそ始めはよううか」

東工大的上田さんは強制力も必要だとする。「10日間連続で休暇を取ることなどを法制化した方がいい。社員が有給休暇をうなづかれていたいのか」

「社員が休んだら業績が下がらないでない変わらない」と懸念する日本総研の山田さんは訴える。「今までのようなことを続けており、雇用のあり方をその一つだと強調する。『日本型の正社員の働き方は元々、長時間労働が前提になつてゐるんです』」

「時間外」と「定時退院」の小旗で仕事の状況を示す例も。働き方は変わらぬか=三重県で8日、井口慎太郎撮影

いたら、企業はもたないですか

よ」。社員を犠牲にした過剰な顧客志向など論外だ。人口減少が続く中、労働者の確保は今後さらに厳しくなる。男性を中心とした正社員だけが長時間労働が増えている。ヤマト運輸の問題がばいいという從来のやり方は限界で、「雇用のあり方などを徹底的に見直すべきだ」と話す。

そもそも休むことはどんな意味があるのか。宗教や愈しにも詳しい上田さんによると、日本人の場合、休むことの意味そのものが確立していない。それが大きな問題だ」と言ふ。

「休暇自体が人生の楽し

みだ」という発想が乏しいんで

す」。実際、政府がフレ金など

をPRする場合、必ず前面に出される状況を作るには何をすべきか。

イクメンの安藤さんは「職場

の空気を決める上司が意識を変えるしかない」と言い切る。「休むと評価が下がるような状況は変わるべきだ。文部科学省を中心とした勤賞文化をなくす運動こそ始めはよううか」

東工大的上田さんは強制力も必要だとする。「10日間連続で休暇を取ることなどを法制化した方がいい。社員が有給休暇をうなづかれていたいのか」

「社員が休んだら業績が下がらないでない変わらない」と懸念する日本総研の山田さんは訴える。「今までのようなことを続けており、雇用のあり方をその一つだと強調する。『日本型の正

明日の「防災の
本当に必要な
防災グッズが
必須アイテム総まとめ

「日本で唯一の「テストする防災本」です!」
Amazon 防災 ベストセラー 1位!!

こんな火山、み
息をのむダイナミックな景観、
眼前に迫る灼熱の溶岩、
平凡な風景に埋め込まれた大噴火
地獄の歴史を変えた巨大火山
身近な日本の火山から
世界の絶景まで
大迫力の大判写真と
気鋭の火山学者による解説で
雄大かつ繊細な
驚くべき火山の姿を描き出す

讀書日記

ブルの「昆蟲記」を読んで昆蟲学者を志す。そして大学、大學院と學問を究め博士にもなる。となればもう立派な昆蟲学者じゃないかと思われがちだが、そうは思えない。なぜなら「食えてないから」。「未だ博士か大臣か」という時代ではない。博士が溢れ、定職を持たない人も多い。最

「はがれいなさい」と娘に説教して
いる親がこんな状態だ。
それにしても、彼を一晩読
み耽らせた本とはいっていい何
だ？　さすがにマンガじゃな
いだろう。ミステリーか？
「バッタを倒しにアフリカ
へ」
え？　いったい何の本なの
か。バッタを倒すって何？
そのためにアフリカへ？　タ
イトル 자체がミステリーだ。
しかし一読、これは本当に
読み耽らせる本なのだった。

い」モメールの返事がすぐ返ってくる同僚教員からの返事が全然来ない。翌朝「丁度読み耽っていてメールに気づかなかった」と返事が来た。何かとても新鮮だ。ひとつ気がつかされた。ぼくたちはこのごろの前にパソコンを開きながら読書していく。来たメールに対応しながら本を読み続ける。昔だったらあり得

今週の筆者は

化人類学者
上田紀行さん

*8月8日～9月4日



応援したくなる奇特な研究

近は「役に立つ」研究が求められる。ノーベル賞を受賞した大隅良典東京工業大学薬学教授も「基礎研究への支援を」と訴えている。バッタの研究など何の役に立つのか。

しかしアフリカでは役に立つ。時にバッタは大繁殖し、風に乗って1日に100キロ以

土も移動し、地上の植物を食べ尽くし、大陸をもたらす。ならばバッタを倒してアフリカを救おう！ 31歳から2年半の西アフリカ、モーリタニアでのフィールドワーク記がこの本だ。

くちや物知りになれる。学問的な内容をこんなに魅力的に書けるのはファーブルが乘ねうつっている。出会う人間でも、様の描写も抜群だ。常に励ましを忘れないバッタ研究所員の愛と想いやり、相棒の運転手との珍道中、学生に2倍のバイト料をだまし取られた

儀式の調査なんて奇特な人さえも思っていたら、ぐいぐい引きこまれ、「われわれに未知の世界を開いてくれる若者よ、前進せよ!」と応援したくなる。

■バッタを倒しにアフリカへ（前野ウルド浩太郎著・2017年）
「バッタに食べられたい」との子供時代からの夢をかなえに、アフリカに渡った若者の記録。研究者魂が熱い。

り、遠くの調査隊へのバッタ情報の心付けがヤギ一頭だったりとか。とにかく一度読み出したら止まらない。

そしていつの間にか読み手は彼をとっても応援したくなる。アフリカの僻地まで行ってバッタの研究なんて、自分とは何の関係もない奇人だと思っていたけど、なぜだか彼にはがんばってほしいと思ってしまうのだ。

そこであつと気づいた。ぼくが31歳で書いた「スリランカの悪魔祓い」（講談社文庫）もこうやって読まれていたのか。異国の田舎の悪魔祓いの話とか。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。著書に「人生のへ逃げ場」「生きる意味」ほか。

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。著書に「人生のへ逃げ場」「生きる意味」ほか。

とにかくがんばれ！ 好きなことをやつても見えるといふ姿を若者達に見せてくれ！ 倒すはずのバッタが喜んじゃダメか。

34歳で初めて給料取りになつたのも同じだ。そしてぼくは「癪しの上田」、彼は「バッタ博士」としてメディアにひっぱりだこに。それって「学問で食えてるのか？」だけど日本でそんなに有名になつてバッタも喜んでいるはず。あつと倒すはずのバッタが喜んじゃダメか。

話とかは30年前とはまったく別物だ。でも異国に身を投じて（ところも）ゼロから挑戦する姿勢は今も昔も変わらない。彼のほうがずっとしたたかだけど、それは研究費なしでは一切研究ができないといふ切実さならでは。

うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「人生の△逃げ
場▽」「生きる意味」ほか。

タバ
とにかくがんばれ！ 好き
なことをやっても食えるとい
う姿を若者達に見せてくれ！

II 東京都目黒区で、渡部直樹撮影

読書日記

東京工業大でリベラルアーツを柱とした一大教育改革が進んでいることは前にも書いたけれど、そのきっかけは2012年だった。新任の池上彰教授、哲学者の桑子敏雄教授と訪れたハーバード大・マサチューセッツ工科大(MIT)、ウェルズリー大への視察の旅は実に刺激的だった。中でも強烈だったのは、MITの学部教育統括部長ヘイティングス教授の発言だ。

「先端科学はその時は世界の先端だが、5年後には陳腐化して使い物にならなくなる。だから大学では先端科学よりも、使えなくなった時にいかに学び直せるかの能力を学ぶべきなんだ」。宇宙航空工学の権威の「5年で使えないことは実にアリティーがある」とは実にアリティーがあった。そして教授はその後にニヤリと笑ってこう続けたのだ。「2500年続いている仏教とか、2000年続いているキリスト教とか、時代を超えて生き続けてきた様々な文化伝統はほんとにすごいんだよ。科学者こそそれらを絶対知つておぐべきなんだ」。そのMITでもっとも尖っている「メディア・ラボ」の第4代所長伊藤穰一氏の新著の原題は「Whiplash」、むち打ち症だ。加速し続ける世界でむち打ち症にならずに生き残っていく、邦題



東京都墨田区で、渡部直樹撮影

今週の筆者は

文化人類学者
上田紀行さん

*9月5日～10月2日



■9プリンシブルズ 加速する未来で勝ち残るために
(伊藤穰一、ジェフ・ハウ著、山形浩生訳・2017年
年) ビジネスが激変し、イノベーションのペースも速まる現代社会。そこで生き抜くために不可欠な原理が語られる。

凡庸化を超えて生き残る

の「9プリンシブルズ」はその九つの原則だ。序文の例が面白い。映画を発明したリュミエール兄弟は大きな名声を得るが「映画には未来がない」と撤退し、後の大成功を収めたが、電話の可能性には冷淡だった。エジン

ンは蓄音機を発明したが、メセージ口述の装置であつて音楽再生装置の需要などないと言った。コンピューター草創期の一大企業DECの社長は家庭用コンピューターの需要などないと言った。エジン

honeが市場シェアを獲得する見込みはまったくない」と公言する。

成功を収めた者は、いかに道の凡庸化を超えて、いかに道を切り拓いていくのか。

九つの原則のいくつかを挙げると、下の不思徳や多様性を嫌う人

たちだ。そこをどうするのか。それでももうひとつ。この原則が重要だとなると、今度は従うより不服徳。能力より多様性。強さより回復力……。

これまで権威ある人が計画を立て、その描いた地図の上のルートを安全に進む道が奨励されたが、もはやそんな時代ではない。まずは実践からスタートし、鋭敏な感性を持ち、権威に盲従せず、多様性ある人たちが協働し、挫折をむしろ糧として進んでいく。実際にまつとうなことが豊

げるだけで、方向性は見えてくる。権威より創発。地図よりコンパス。安全よりリスク。従うより不服徳。能力より多様性。強さより回復力……。これまで権威ある人が計画を立て、その描いた地図の上のルートを安全に進む道が奨励されたが、もはやそんな時代ではない。まずは実践からスタートし、鋭敏な感性を持ち、権威に盲従せず、多様性ある人たちが協働し、挫折をむしろ糧として進んでいく。実際にまつとうなことが豊

富な実例とともに書いてある。これはまさに東工大の改革の目指すところだと意を強くした。

しかし言うは易いが、実践が大変だ。教授とか会社の偉いさんの多くはまさに「過去に乗り遅れ、その勝者のマイクロソフトの最高経営責任者(CEO)はこんどは「IP

ので、地図を描きたがるし部

に成功した」「権威」そのも

ので、地図を描

読書日記

敬愛する人生の達人に勧められた一冊。半藤一利さんと阿川佐和子さんが選んだ八人の「昭和の男」について語り合っていること。

しかし「昭和の男」って誰？ 昭和と平成がもうすぐ半夕になるぼくは、それに六十四年間の昭和時代から八人というのは少なすぎない。

などと考えつ本を手に取つたが、これがなかなかの対談だ。昭和五（一九三〇）年生まれの半藤さんのセレクションが鈴木貫太郎（元首相）、今村均（元陸軍大将）、松本清張（作家）、同二十八年生まれの阿川さんがウォーリズ（建築家）、植木等（歌手・俳優）、小倉昌男（元ヤマト運輸会長）。明治や大正生まれでも「昭和に活躍した人」で、半藤さんが戦前中心、阿川さんが戦後中心の人選だ。編集部の要望で二人の父、半藤末松と阿川弘之も加わった。「私の人生はこの親父から逃れるかという戦いだった」という阿川さんはかなり抵抗があったようだけど。

話術の達人二人だからまだ面白いことこの上ない。特に実際に会った六人は逸話も満載。松本清張が小説の終わりが見えると執筆意欲をなくしあつけない結果ばかりだと、宅急便を築き上げ官僚

とも壮絶に闘つた小倉昌男が、晩年は六畳に満たない事務所を根城に、障害者が働くパン屋作りに没頭していたとか。植木等があまりにおとなしい人で、対談が植木その人より戦後の「無責任」や、スイーツラ節と親鸞思想の近似や、弟子の小松政夫の話に脱線していくのも面白い。そし

今週の筆者は

文化人類学者
上田紀行さん

*10月3日～11月6日



■昭和の男（半藤一利、阿川佐和子著・2017年）
作家の半藤一利さんとエッセイストの阿川佐和子さんが「昭和の男とは何なのか」を巡って語り合う。装画は和田誠さん。装丁は南伸坊さん。



見失われた「無私」の精神

現地収容所に送つてくれ」と申し入れてマッカーサーを感じさせ、現地で服役。帰国後も自宅に建てた「譲償部屋」と称する三層一間の小屋に亡くなるまで住み続けた。敵将も感激させ、現地の人たちに感謝される軍人。感動した。「昭和の男」に共通しているのは「無私」の精神だ。二・二六事件で銃撃され六十八歳で一命をとりとめた鈴木貫太郎は七十七歳で総理大臣に指名され終戦を導く。何としても天皇を生かしたいという

うえだ・のりゆき 東京工業大学リバーラルアーツ研究教育院長。著書に「ダライ・ラマとの対話」「人生の△逃げ場」ほか。

筆者は上田紀行、松井孝典、津村記久子、平田オリザの各氏です。

て「男」を語る中で、強力な「女」たちが登場するのも読みどころだ。その中で「無名」な「昭和の男」にぼくは打たれた。今村均（陸軍大将）。インドネシアで「日本は占領軍じゃない、ランダからの独立運動指導者のスカルノらを釈放し、学校

や病院をつくり、大本營から院まれても屈しない。戦後の戦犯裁判でオランダから死刑を求刑されてもインドネシアの人たちが「彼は何も悪いことをしていない」と守って無罪に。しかしラバウル占領に対する禁錮十年が確定するとき、「黒鴨ではなくて、自分と、黒鴨ではない、自分と、の部下が服役している過酷な

思い。この社長に惚れたとか

この先輩だけは裏切れない、

自分のためではなく誰かを生

かすために働く。それは平成

となって見失われた昭和の美

徳だ。

もう一人の「無名」人、半

藤末松。海軍、警官、運送業、

区会議員。彼は太平洋戦争が

始まったとき、「もうこの国は



や病院をつくり、大本營から院まれても屈しない。戦後の戦犯裁判でオランダから死刑を求刑されてもインドネシアの人たちが「彼は何も悪いことをしていない」と守って無罪に。しかしラバウル占領に対する禁錮十年が確定するとき、「黒鴨ではなくて、自分と、黒鴨ではない、自分と、の部下が服役している過酷な

思い。この社長に惚れたとか

この先輩だけは裏切れない、

自分のためではなく誰かを生

かすために働く。それは平成

となって見失われた昭和の美

徳だ。

もう一人の「無名」人、半

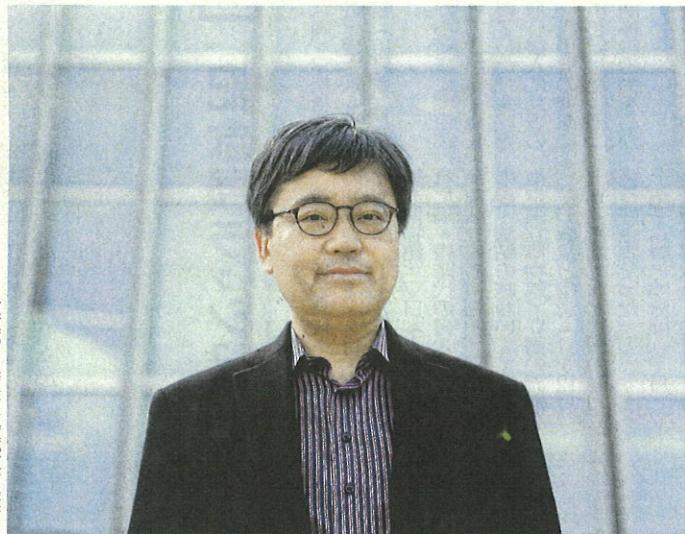
藤末松。海軍、警官、運送業、

区会議員。彼は太平洋戦争が

始まったとき、「もうこの国は

讀書日記

婚という意味みたいだ。パクリながら意味が違うとは適当というか、日本人お得意の融通無碍さで、さらにボップな表紙、小ネタ大ネタ満載の軽妙洒脱な文章で、色物感満載で、しかしそれに騙されただ。しかしとにかく、笑わせられなが
らそこには人間のやさしさが、そして宗教と信仰の深遠な世界へと導かれ、ハッときさせられる哀しさ、いどわしさが、瞬間にがらばめられている。小さいときから「死んだら



II 東京都目黒区で、渡部直樹撮影

うえだ・のりゆき 東京工業
大學ベルアーツ研究教育院
長。著書に「ダライ・ラマと
の対話」「がんばれ仏教！」
ほか。

謝。笑ってください、泣いてください、そして目覚めてください。

でもこの世界の片隅で生き残ることの問い合わせに突き当たって、まい、そこで魂の救済を求める信仰に行き当たった「人が」ここで出会ったねと思えば、基督教は違つても二人は仲間なのだ。ダライ・ラマも、「キリスト教徒に仏教に改宗してほしいとは言いません。私たちが自らの信仰を深めることで、私たちを近づけ、世界平和をもたらすのです」とおっしゃっていた。

異宗教間結婚のドラマ

「どうなるんだろう」という問い合わせにとりつかれ、聖書を読み、コーランを読み、法華經に出会って感動し、好きな落語で仏教を広めようと落語家になり、後に僧侶にもなってしまふガチの仏教女子が何とクリスチャンに恋をしてしまう。彼は太神樂曲芸師。どう考えても神道でしょという職業にして、家がキリスト教でもない

いのに自分で信仰に入った方が
チのキリスト者だ。

この設定からしてもう面白い
展開が予想されるわけだけ
れど、最初に泣かされたのはま
知られたら振られるのではな
クリスマスチャンだということを
ひた隠しにしていた彼がどう
どうカミングアウトしたとき
の、著者団姫さんの「あなたが
が信仰を持つ人で、今、とつ

でも嬉しいです」というひと言。うーん、これは深い。
そう、「異宗教間結婚」が難しいのは、二つの宗教〔聖団〕間の関係になってしまふからだ。モンタギュー家のジミオとキャラップット家のジリエットみたいに「家」と民族とか「宗教」という△集団△が二人を引き起きて、暴力を生みだしていく。

な二人だったはずなのに「離婚したい」と考へてしまう時が訪れる。実は彼は発達障害で空気が読めない、ちぐはぐな行動を繰り返す。それを妻は必死で直そうとし、疲れ切り、絶望しつづけた。

今週の筆者は

文化人類学者
上田紀行さん

*11月7日～12月4日



■聖ニさん（露の団姫著・2017年）

春秋社 · 1512 冊

読書日記

新年「読み初め」は何にしようか。年越しでミスティリーの謎が解き明かされるなんていうのも素敵だけど、ここは未来を展望する本がいいなどと思いつつ、しかしその一冊がなかなか見つからない。そこで急に方針転換。新年はアリストテレス!

大学でいま斬新なりべラル・アーツ教育改革を推し進めているけれど、リベラルアーツとはアリストテレスの「アーツ」とつまりへ人間を自由にする技のことだ。その起源の古代ギリシャ・ローマ時代では、社会は自由市民と奴隸からなっていて、自由市民が持つべき素養が「自由七科」と呼ばれるリベラルアーツ。文法学、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽だ。もちろん現代のリベラルアーツはその七つだけではダメだ。しかしそもそもリベラルアーツを学べば誰でも自由市民になれたのだろうか? そして奴隸って、そして自由市民とはどんな人たちなのか?

そこでプラトンの弟子、ソクラテスの孫弟子にして「哲学の祖」と呼ばれ、「知を愛する」「フィロ・ソフィア」から「哲学」の語源も生みだしたアリストテレス先生の登場だ。ところが……、「財産のうち、最良の、そして家政上最も重要なものが



今週の筆者は
上田紀行さん

*12月5日～1月8日

文化人類学者

上田紀行さん

第一の問題で、そして最も不可欠だ。これはすなわち人間である。そこで、まず第一に役に立つ奴隸を手に入れることが必要である(『経済学』第一巻第五章)

おおっと、これは? 近代人のわれわれから見ると、奴隸制は廢絶すべきものだけアリストテレス先生は

真の自由市民になるために

いる人のことだ。

うーん、これはキツイ。現代のわれわれは自由市民に見えながら、日々誰かの命令に従って生きている奴隸じゃないのか。奴隸制は廃止されたが、「善きもの」を探求する余裕などなく、あくせく働くされている。誰かが設定した評価軸の中で成果を上げようと必死になればなるほど奴隸になってしまふわけだ。

そこからの解放が現代のリベラルアーツが目指すもので、大学教育でも実現しようとしているわけだが、アリストテレス先生は「生きる意味」「人間らしさ」ほか。

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。著書に「生きる意味」「人間らしさ」ほか。

筆者は上田紀行、松井孝典、津村記久子、平田オリザの名氏です。



■アリストテレス全集 第15巻 「政治学」「経済学」
(アリストテレス著、山本光雄、村川堅太郎訳・1969年 岩波書店・品切れ)
■ニコマコス倫理学 上・下 (アリストテレス著、渡辺邦夫、立花幸司訳・2015、16年)
光文社古典新訳文庫・各1,582円

つけから「自由市民には奴隸が必要だ」と言い切っている。自由市民とは政治——共同体の運営——と、哲学——知識の探求——に生きる人たち。中でもより大切なのは哲学で、知を愛し、善きものを探求する人たちだ。彼らは生活のための労働などやっていらぬ。しかし奴隸とは「他

人のものであることができる」とアリストテレス先生は気になることで、近頃の「人間、すなわち理」をもっても書いている。「もし道徳がいざれも人に命じられてか、あるいは人の意を察してか自分の為すべき仕事を完成することができるなら、(中略)職人の親方は下働きを必要とせず、また主人は人は奴隸を必要としないであ

讀書日記

「多様性と平等、人間的な關係を大切にする組織、だ。」
それらは人間の意識の進化に対応している。強者の勝手な意図に振り回され無力な意向が生じるアンバランスのレッド、組織の全員が從うべき規範が生じるアンバランス、個人個人が自由に自己の成功を最大限に達成しようと努力するオレンジ、そして他者とのよりよい関係性を求めるグリーン。自由な「個」が確立



ぼくたちの多くは組織で働いている。だから自分の幸福度は組織の良し悪しに大きく左右される。だけど良い組織とはいったい何だろう？ 給料が良ければいい？ 人間関係？ 仕事のやりがい？ そんなことを考えていたら、友人がふ厚い本を貰ってくれた。「ティール組織」。まったく聞き慣れない名前。何なんだこれは。

する前の段階がアンバーまで、「個」の確立がオレンジ、「個」という関係性の希求がグリーンだ。

今会社の多くはオレンジを目指していて、しかし上意下達の軍隊的なメンバーもまだ存在し、しかし一部の企業や非営利組織(NPO)などがグリーンを目指しているとい

うことになるのだろう。過疎化した成果主義のオレンジの世帯が広がるにつれ、社会はどう生きづらくなり、「自由な個」の成功を追求しているはずなのに、逆にどんどん自己が機械のように思えてきてしまう。ならば人間らしい関係性のグリーン型組織がいいのではと思うが、実はその先の

ティール(進化型)が決定的に重要だというのがこの本だ。ティール組織で初めて、われわれの意思決定の基準が一般的なものから内的なものになる。私は自分に正直に自分をしく生きているだろうか。自分が本来の自分の姿を反省ながら、極めて生き生きとした組織。その組織には三つの

自分に正直に生きる

特徴がある。上司や経営陣はおらずメンバーは自主經營陣として存在する。ひとりひとりが役割をつた人間として存在する。利益や効率性といった外的成因ではなく、組織の存在目的で耳を傾ける。

そんな組織が実際にあり得るのかと思ってしまうが、実はこの本には世界中で調査した実例がたくさん取り上げられている。例えばオランダのビュートゾルフは地域看護の組織で今や7000人の看護師が在籍しているが、10名目けがえのない人間」ほか。

指令で患者の家を駆け巡る。活から一転し、じっくりと患者に向き合い、なおかつ労師も人間的な充足度が格段に高くなつたという。

そうそう、会社もどこもしこも、評価や調整のための管理部門の何と多いことだう。みんなが忙しくなり、本業的な仕事に向かい合える時間はどんどん少くなり、そして生きる喜びも少なくなる。自分が自ら楽しく生きているか自分が深まっているか。そんなことは仕事とは別だと最から諦めているのが、そもそも人間の敗北なのかもしない。自分に正直に生きる。そのシンプルな出発点の大さを深く思い返した。

今週の筆者は

文化人類学者

*1月9日～2月5日



■ ティール組織——マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現（フレデリック・ラルフ著 鈴木立哉訳、嘉村賢州解説・2018年） 英治出版・2700円
上下関係や売り上げ目標のない組織に新たな経営を探る。

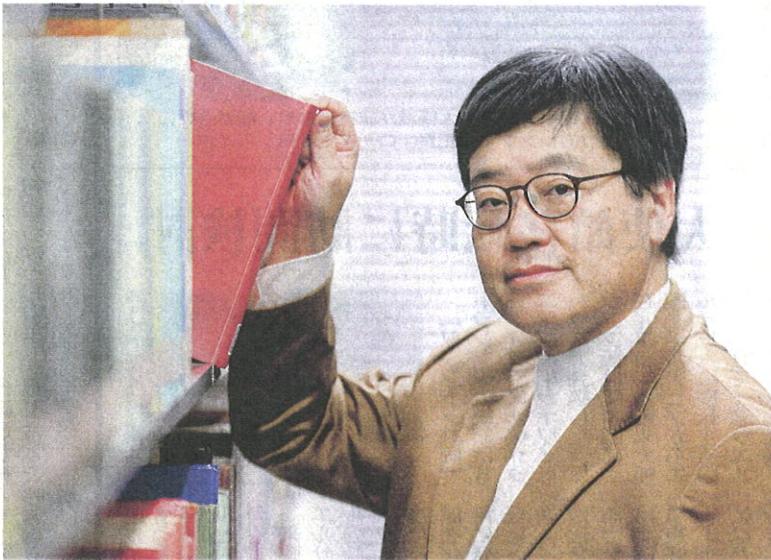
読書日記

原発事故の三年後の二〇一四年七月から一七年九月までの三年間撮り続けられた百五十枚以上の廃炉現場の写真が収められている。

克明な写真だ。大判のカラーワイド写真を一枚一枚めぐっていくと、何かゾクゾクとした感覚が湧き上がってくる。一般人が立ち入ることができない現場。防護服を着た人たちが働いている姿をテレビや雑誌で断片的に見知っている。

しかしこれだけまとまった数の写真を見続け、蓄積されていく感覚は圧倒的なものだ。それは原発が金属とコンクリートからなる巨大なプラントであるということを再認識させる。無数の鋼管がありめぐらされタンクが立ち並ぶ。知っていたはずなのだが、その姿をここまで詳細に見たことはなかった。「原発は安全でエコなエネルギーです」という繰り返し流されていたCIMでの原発のイメージはもつと抽象的なものだった。

人間も健康なうちは自分の体を意識しない。しかし病気になつてはじめて自分の内臓や血管の存在が浮かび上がってくる。重篤な病になつて開腹手術を余儀なくされ、初めて自分の臓器を目の当たりにしたようなショックがここに



—東京都墨田区で、渡部直樹撮影

■今週の筆者は
文化人類学者

上田紀行さん

*2月6日～3月5日



■福島第一廃炉の記録（西澤丞著・2018年）
文、篠山紀信 写真・2018年)
みすず書房・3456円
日経BP社・2916円

現代文明問う「現場」の写真

津波、しかし国会事故調査委員会はこの事故は人災だと断定している。ぼく自身も原発建設に携わった技術者に尋ねたことがある。 Chernobyl や Fukushima 原発事故の後、フランスやドイツはすぐに原発にベントフィルターを装備した。放射性物質を回収するフィルターをつければ、事故が起こっても汚染は最小限にとどめられる。なぜ日本の原発にはひとつもフィルターがないのか。

「原発は100%安全とキャンペーンしていたので、事故を想定したフィルターを付けようとは言い出せなかつたの

科 学 技 術 先 進 国 日 本 で 起 こ つたこの事故は確実に人類史に残る大事件だ。廃炉の現場の写真一枚一枚は現代文明のあり方を鋭く問いかけてい

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長 著書に「覚醒のネットワーク」「人間らしさ」ほか。

筆者は上田紀行、松井幸典、津村記久子、平田オリザの各氏です。

目の前に一冊の写真集がある。

はある。

「福島第一廃炉の記録」。原発事故の三年後の二〇一四年七月から一七年九月までの三年間撮り続けられた百五十枚以上の廃炉現場の写真が収められている。

克明な写真だ。大判のカラーワイド写真を一枚一枚めぐっていくと、何かゾクゾクとした感覚が湧き上がってくる。一般人が立ち入ることができない

現場。防護服を着た人たちが働いている姿をテレビや雑誌で断片的に見知っている。

しかしこれだけまとめた数の写真を見続け、蓄積されていく感覚は圧倒的なものだ。

それは原発が金属とコンクリートからなる巨大なプラントであるということを再認識させる。無数の鋼管がありめぐらされタンクが立ち並ぶ。知っていたはずなのだが、その姿をここまで詳細に見たことはなかった。「原発は安全でエコなエネルギーです」という繰り返し流されていたCIMでの原発のイメージはもつと抽象的なものだった。

人間も健康なうちは自分の体を意識しない。しかし病気になつてはじめて自分の内臓や血管の存在が浮かび上がってくる。重篤な病になつて開腹手術を余儀なくされ、初めて自分の臓器を目の当たりにしたようなショックがここに

出でください」。その写真は

でしよう

ぼくがパリでの会議で発表

を

したとき、各国の参加者た

ちはフリーズした。「何で白

い

ールされているのか。

一枚一枚の写真には撮影者

の西澤丞氏の解説文が付く。

「線量が高くここでの撮影は

20分限定だ」「一枚撮ったら

防衛するプラント、巨大な工

場、圧倒的なモノの集積の中

に人間がいる。人間は機械を

コントロールしているのか、

それともこの機械にコントロ

ールされているのか。

自分の任務をこなしているの

だ。

なぜこんな事故が起つて

しまつたのかという思いが自

然に湧き上がってくる。地震、

大自然の力だ。

なぜこんな事故が起つて

しまつたのかという思いが自

然に湧き上がつてくる。地震、

自然の力だ。

なぜこんな事故が起つて

しまつたのかという思いが自

読書日記

「あなたはイスラム教徒の友達がいますか? 話をしたことありますか?」と聞かれれば、「ない」と答える人が大部分だろう。

「でも、イスラムってどんな人たちかって知っていますよね?」と言われば、「もちろん知っていますとも!」と答える人が多いのではないか。

「男は白い着物を着て、女性は黒ずくめ。中東の砂漠に住んで、大きな刀持つて、一日に何回もメッカを向いて礼拝して、お酒も飲めない、豚も食えない。人生が縛られている。女性も目だけ出して、そして過激派はイスラム教のためなら何でもやっちゃう。ほんとに怖い人たちです」

友達もいなければ、話したこともない人たちについて、そんなイメージを持っているとすれば、それは100%メディアから得たものだ。確かにイスラムがニュースになるほとんどは戦争が関わっている。中東戦争、過激派組織「イスラム国」(IS)、そしてテロリスト……。

しかし世界に16億人以上いるイスラム教徒の大部分は戦争ともテロとも関係ない庶民だ。イスラム人口の多い国トップ10は、インドネシア、パキスタン、インド、バングラデシュ、エジプト、ナイジリア、イラン、トルコ、ア

今週の筆者

文化人類学者
上田紀行さん

*3月6日～4月2日



■お隣りのイスラーム——日本に暮らすムスリムに会いにいく(森まゆみ著・2018年)
紀伊国屋書店・1836円
聞き書きの名手である著者が、日本で生活するイスラム教徒たちを取材、その多様な暮らしを紹介する。

個性豊かな13人の語り



うえだ・のりゆき 東京工業大学ペラルアルツ研究教育院長
書評に「人間らしさ」「ダイ・ラマとの対話」ほか。

はない」「シリア人として、パレスチナはうらやましかった。彼らは少なくともデモができる」「ユニシアからの留学生先が沖縄の大学。豚食の土地とは知らず往生したけど食堂で特別な出汁を作ってくれたり、みんな本当に優しかった」「イランでは日本はみんなちょっとだけ着物着てると思ってたので、来日してがっかりしたよ」

世界中から来た人たちだから文化が全然違う。性格も違う。でもみんな豚肉は食べない。そしてラマダン(断食月)

人より個性豊かかも!」と思ってしまうことうけあいだ。上記トップ10から4カ国十ヶ国、マレーシア、ウズベキスタン、チュニシア、セネガル、シリヤ、クルド、パレスチナ、ウイグルの八つの国と地域、そして職業もレストラン経営、石鹼販売、絨毯販売、舞踊家、日本の会社員、研究者、哲學の話まで。

「イラン人は自分がいちばん個人主義。かたまって住んだりしない。何か聞かれてもそれは知らないとか絶対言捨て。困っている人を助けることである。家族も助け合うし、日本でも震災の被災者を助けに行く。ぼくも知り合いのトルコ人のご家族に断食明けの

食事に招かれたとき、「トルコ人は困ってる人を見るとき、自分の出から日入りまでの断食は厳格に守る。それは我慢の訓練、感謝の訓練だ。そしてみんな助け合う。イスラム教の五行の一つは喜んで、みんな語る語る。祖国の話から、自分の家族や人生の話まで。

」「トルコ人は自分のがいちばん個人主義。かたまって住んだりしない。何か聞かれてもそれは知らないとか絶対言捨て。困っている人を助けることである。家族も助け合うし、日本でも震災の被災者を助けに行く。ぼくも知り合いのトルコ人のご家族に断食明けの

讀書日記

その頃この「怠惰の美德」を読んでいたらどうだつただらう?

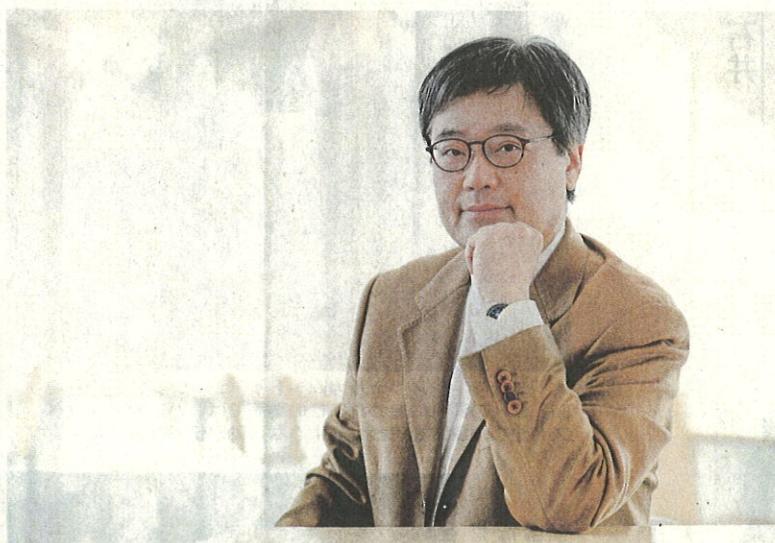
ます夜にばれこんでいく。
本を読んだり物を書いたり、充実した夜もあったとは思つ。でも周期的に絶不調に陥つていた。論文書きとか、全然ヤル氣が起きず、昼前に起きて午後もぼんやりと過ごしてあつという間に夜になり、深夜になるともうこれから何をやつても大して進まないと観念し、ああ、今日も何もやらずに一日過ぎてしまつたと後悔し、しかし翌日もまた同じ事が繰り返される。こうやって何も生みださずに一生終わるんだなあと観念して

20代半ばから30代にかけて、ぼくは朝の記憶があまりない。脣前まで寝ていたからだ。小学校から高校までは遅刻もせず学校に通った。大学も最初のうちは通った。しかし途中からもういけない。

今週の筆者は

文化人類学者
上田紀行

*4月30日



無為とは異なる氣骨

The image shows the front cover of the book 'Ei no Tei'. The title '美德の惰' is written in large, bold, vertical characters at the top. Below it, the author's name '梅崎春生' is also in vertical characters. The central illustration is a detailed drawing of an octopus, its tentacles spread wide. At the bottom of the cover, there is a decorative border of stylized sunburst or flower-like motifs, and the publisher's name '中華文庫' is printed at the very bottom.

■ 怠惰の美德(梅崎春生著、荻原魚雷編・2018年)
■ ボロ家の春秋(梅崎春生著・2000年) 中公文庫・972円
■ 藩政士文芸文庫・112125

講談社文芸文庫・1512

た横になり、3時から6時にやっと原稿を書いて、その後は食事と晩酌で9時半には寝る。自主的に怠けてるのはだら誰にも後ろ指をさせないだろうとうそぶく作家。作家になる前からそうらしい。旧制五高の入試の前には猛烈に勉強したが、入学後は

急げ癖が出て落第。でも当時の東大国文科に無試験入学し、4年間試験日以外は一日も出席せず卒業。東京市教育局の研究所に就職するが、任せられた仕事から逃避して勤務時間中に役所の中で仲間とぼくちをしたり、調査と称して街を放浪したり、安酒を飲ん

でたり。「ぬるま湯に入つて
いるような毎日であった。し
かし私はこの生活は苦痛でな
かった」

うーん、この徹底ぶりは筋
金入りの怠惰だ。そんな生活
で直木賞作家になれるのか？
そうそう、中学生時代の我
が家には「現代日本の文学」
金50巻があって、その一巻に
係や徒弟制度が存在する
団の中で自我を埋没させ
によりかからうとする精
梅崎は心から嫌悪してい
日本人の勤勉さが、自
深める方向ではなく、自
埋没させる方向に向いて、
こと、その構図はこの作上
没後から50年以上経つた
変わったのだろうか。梅崎

梅嶋春生は相名謙三と一緒に収まっていたので名前だけは知っていた。でもどんな小説を書いていたんだ?と思いつつ、直木賞受賞作の「ボロ家の春秋」を読み始めた。そのエモアと語り口のあまりの巧さに面白くて止まらなくなったり、あやうこの原稿も書けなくなるところだった。やっぱり単なる「怠惰の人」ではないのである。

この本には「日本の氣質とは、一言に尽せば、精神の本質的な衰頽である」という強烈な言葉もある。戦後の進歩的な団体内でも親分子分の関

曰吾は寝てへてしている猪
きではないと言い、風の吹
枝に逆さにぶら下がって、
蝙蝠のような形、早瀬の水
で流れに逆らって静止して
る魚の形が好きだと言
き、そこには単に状況に流
れていく無為とは違つたむ
う氣骨が見え隠れする。
生来ほんとうに怠惰が好
なのだと思う。しかしそぞ
惰の側から見えてくる曰
姿がある。戦争、仕事、…
…人間が主人公になれば
システムに屈従し、関係に
没する。

この本には、日本的氣質とは、一言に尽せば、精神の本質的な衰頽である」という強烈な言葉もある。戦後の進歩的な団体内でも親分子分の闇トク「人生の逃避場」。

姿がある。戦争、仕事、人間が主人公になればシステムに屈従し、関係を没する。

怠惰は怠惰でも「美德」ある。ぼくも自分の怠惰をら多くを得てきたのだとか。何かそんな気がしてきま。そして皆さんもご自分「怠惰」に心からの感謝

曰向は寝そべっている痛
きではないと言い、風の吹
枝に逆さにぶら下がって、
蝙蝠のよな形、早瀬のち
で流れに逆らつて静止して
る魚の形が好きだと言ひ
き、そこには單に状況に連
れていく無為とは違うのだ
いう氣質が見え隠れする。
生来ほんとうに怠惰が好き
なのだと思う。しかしその怠
惰の側から見えてくる曰向
姿がある。戦争、仕事、山
システムに屈従し、関係に
没する。

読書日記

数年前、家の近くで殺人事件が起きた。交際を断られた男が女性のアパートを訪れて女性を殺害し、逃走した後に自殺、という何ともやりきれない事件だった。

そのアパートは駅へ行く途上にあつたが、ぼくは事件後、別の道を選ぶようになつた。道から見える部屋で人殺しが行われたと思うと背筋が寒くなつた。何かに乗りうつられないとどうか。でもときどきその道を通っては、アパートに何の変化もなく、通り過ぎても自分に何も起きないことにはホッとした。

部屋はどうなるのだろう。おそるおそる賃貸サイトを検索した。家賃は超格安になつていて、部屋の内観はサカキの鉢植えの写真、告知事項に「殺人事件がありました」、「お祓い済み」と書かれていた。そんな部屋に住みたい人がいるのだろうか?

「事故物件を集めめたサイトがあるんですよ」。行きつけの美容師が教えてくれた。彼は近所の噂も、ネット上の情報もものすごく詳しい。サイトを見みると地図上に事故発生物件がプロットされていて、自殺、孤独死、火災死、殺人……。その多さに愕然とした。どの町も事故物件だらけだ。でも事故の履歴を消すた

= 東京都目黒区で、渡部直樹撮影



文化人類学者
上田紀行さん

*5月1~28日

瑕疵
借り



■瑕疵借り（松岡圭祐著・2018年）
講談社文庫・713円
自殺や不審死、失踪など、瑕疵説明責任が生じる「瑕
疵あり物件」。大家や管理会社から依頼を受けた藤崎は
そこに住み込み、賃借人の人生をあぶり出していく。

訛あり物件をめぐる心理

数年前、家の近くで殺人事件が起きた。交際を断られた男が女性のアパートを訪れて女性を殺害し、逃走した後に自殺、という何ともやりきれない事件だった。

そのアパートは駅へ行く途上にあつたが、ぼくは事件後、別の道を選ぶようになつた。道から見える部屋で人殺しが行われたと思うと背筋が寒くなつた。何かに乗りうつられないとどうか。でもときどきその道を通っては、アパートに何の変化もなく、通り過ぎても自分に何も起きないことにはホッとした。

部屋はどうなるのだろう。おそるおそる賃貸サイトを検索した。家賃は超格安になつていて、部屋の内観はサカキの鉢植えの写真、告知事項に「殺人事件がありました」、「お祓い済み」と書かれていた。そんな部屋に住みたい人がいるのだろうか?

「事故物件を集めたサイトがあるんですよ」。行きつけの美容師が教えてくれた。彼は近所の噂も、ネット上の情報もものすごく詳しい。サイトを見ると地図上に事故発生物件がプロットされていて、自殺、孤独死、火災死、殺人……。その多さに愕然とした。どの町も事故物件だらけだ。でも事故の履歴を消すた

めに、不動産会社がいちどダメで借りて、その後の借り主には何も言わず貸しやうまいですよ。なんでそんなことに詳しいのか。ほんとうにそんなことがあるのだろうか?

松岡圭祐「瑕疵借り」はまさに事故物件に住むことを生業にしているんだから、ほんとうにそんなことがあるのだろうか?

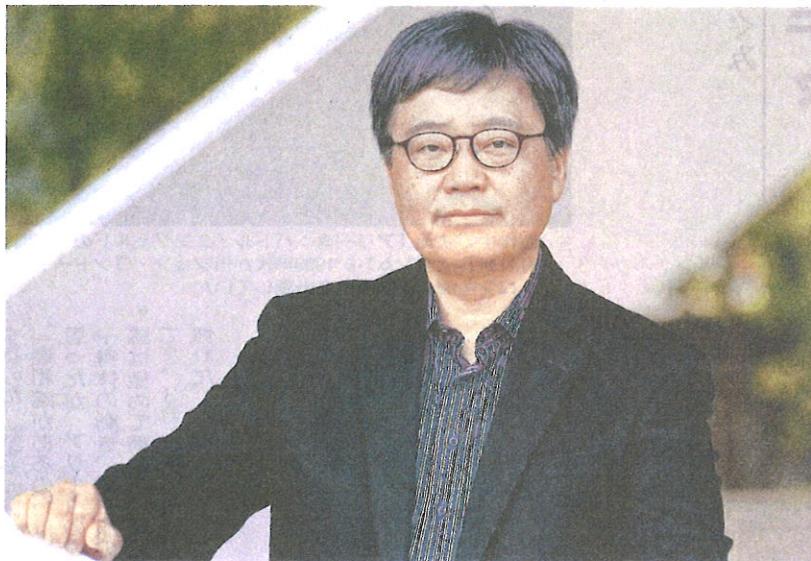
とする「プロ」が登場する連作ミステリーだ。小説とはいえばくの積年の疑問に答えてくれるので、手が伸びた。そもそもそんなプロがあり得るのだろうか。事故物件に住める鈍感力の持ち主なのが、かはたまたものすごい靈力で怨霊と対決するのか?

どちらでもなかつた。むちやくちゃ頭のいい探偵みたいな人だつた。だからミステリー小説になるわけだけど、誰かが間に住めばいいわけではないつだ。最低2年後までは告知をしなければいけないらしい。ならばプロは2年間物件に住み続ける人なの

筆者
今週の筆者

讀書日記

ほくたちは彼の大ファンだったけど、一方で彼の欠けていたところを話の種によく盛りあがった。そのくせ他の学生から彼が批判されたりする



II 東京都目黒区で、渡部直樹撮影

うえだ。のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「覚醒のネットワ
ーク」「人生の△逃げ場」。

図を持つことで、ぼくたちは現実に立ち向かう大きな勇気を得て、一步前へと踏み出すことができる。40年前のぼくがそうであったように。

しかし既に地球の容量は行き、現代はあきらかにへ有限性▽の時代への転換期だ。その意識は若い世代に顕著だ。△無限性▽の時代の年長世代は、発展する「未来」のために現在を我慢する。しかもはや先進国の若者たちは、未来のために現在を犠牲しない。シンプルなライフスタイルの中で友人と触れ合い、自然と触れ合い、豊かな会話を楽しみ、お金のかからない喜びを得ている。「未来」のために「現在」を疎外するのではなく、今ここを豊かに生きる時代が到来している。

筆者は
名氏です

明快な幸福への見取り図

と、むきになって彼を弁護したりした。教員は魅力がありつつ貶されてなんばだ。学生はそうして自分の立ち位置を見つめ、そして仲間ができる。その教員、見田宗介氏が80歳にして新著を出した。「現代社会はどこに向かうか」。

本は、新書としても薄い本だが、そのぶん極めて明快に、社会の過去・現在・未来の見取り図が描かれている。

現代は「軸の時代」からまぐろ無限性の終焉期である。「軸の時代」とは仏教

クリスト教といった普遍思想が生まれた時代で、人々が小共同体から外部の無限性へと、貨幣経済へと投げ出された時代であった。そこから人類は2000年以上にわたって△無限▽の発展を目指し、自然を切り開き、人口・生産を強迫から解放された人間は、アートと文学と学術の自由を、歌とデザインとスポーツと冒險を楽しむ。旅、友情、恋愛、こどもたちとの交歓を楽しむ。太陽や風や海との交歓を楽しむ。それらは資源の見田氏は言う。経済競争の

■ 現代社会はどこに向かうか 高原の見晴らしを振り返り開くこと（見田宗介著・2001-8年）

筆者

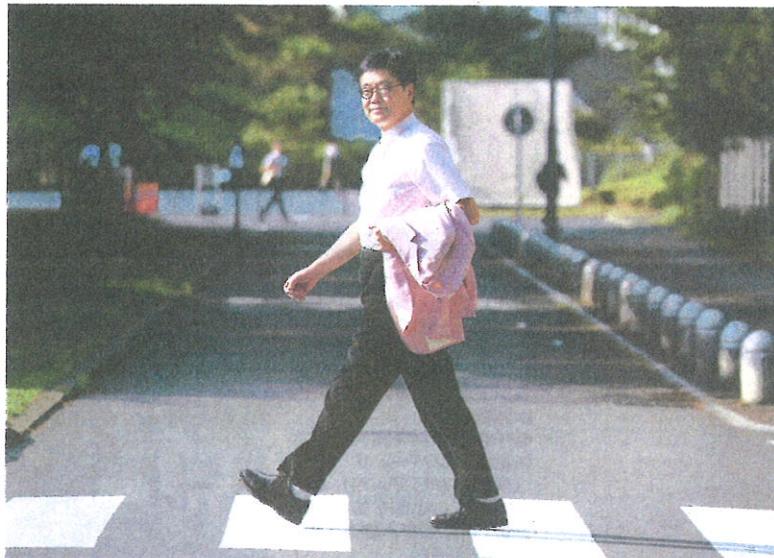
文化人類学者
上田紀行さん

*5月29日～7月2日

読書日記

「博士」とほどんなイメージだらうか。学問を究めた人、博識な人……でも専門馬鹿、世間知らず……。博士の多くが民間に就職する海外と違ひ、ほとんどの研究者となる日本では、不幸なことに「博士なんて使い物にならん」と言う企業人がかつては(今も?)多かった。確かに文系も理系も進級するにつれタコ壺になつていく。研究室に閉じこもり実験や研究に没頭し、他分野の学生とも、社会からも世間からも隔絶していく。

優秀な頭脳がもつたないい。東工大では博士課程でもリベラルアーツ教育を必修化した。専門がまったく違う学生4人組が2ヶ月間討議してグループ発表する。テーマは国連が定めたSDGs(17の持続可能な開発目標)で、昨年は1番の「貧困の撲滅」、今年は16番の「平和と公正」だ。3割以上が留学生で討論や発表は全て英語。年齢も20代から60代まで、数学と生命工学と機械工学と経営工学の学生が一緒に貧困の撲滅を論じるなどという、前代未聞の場が生まれた。超眞面目な哲学的発表から、世界の改革プラン、「そんなのアリ?」といふ荒唐無稽な新製品の開発プランまで、多種多様なボスター発表が行われ、その場はものすごい熱気に包まれ



東京都墨田区で、玉城達郎撮影
うえだ・のりゆき 東京工業大学
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「かけがえのない人間」「がんばれ仏教!」ほか。

うえだ・のりゆき 東京工業大学
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「かけがえのない人間」「がんばれ仏教!」ほか。

筆者は上田紀行、津村記久子、平田オリザ、西垣通の各氏です。

筆者は
今週の

文化人類学者
上田紀行さん

*7月3~30日



■追跡 日米地位協定と基地公害 「太平洋のゴミ捨て場」と呼ばれて(ジョン・ミッチャエル著、阿部小涼訳・2018年) 岩波書店・2052円
沖縄や岩国、横須賀など在日米軍基地の汚染を追ったルポルタージュ。さまざまな軍事公害が明らかにされる。

世界と向かい合う深い場

「博士」とほどんなイメー

る。

発表の後に専門家の講演も

鳥伺も沖縄を訪ね、基地の騒音や米兵の犯罪等については知っていた。しかし有害物質の漏洩等は偶發的な事故だ

と思っていたが、まったく違つたのだ。

米軍基地そのものが環境汚染の元凶なのだとミッチャエル

はジョン・ミッチャエル氏。追跡『日米地位協定と基地公害』と『太平洋のゴミ捨て場』と

呼ばれて」の著者だ。ぼく自身何回も沖縄を訪ね、基地の騒音や米兵の犯罪等については知っていた。しかし有害物質の漏洩等は偶發的な事故だ

と思っていたが、まったく違つたのだ。

米軍基地そのものが環境汚染の元凶なのだとミッチャエル

は言った。しかし沖縄の基地の状況はまったく違う。

日米地位協定第4条「合衆国は、この協定の終了の際

又はその前に日本国に施設及び区域を返還するに当たつて、当該施設及び区域をそれらが合衆国軍隊に提供された時

の回復の代りに日本国に補償する義務を負わない」

米軍はどんな環境汚染引き起こしても原状復帰も補償もしなくていいのだ。

ベトナムで奇形児を含む悲劇的な健康被害をもたらした

そして今もジェット燃料や、胎児に対して有毒な泡消火剤等の流出が頻繁に起こっている。

ドイツでは浄化費用の25%

のみがドイツ政府の負担であ

り、韓国でも米軍は費用の負担

がある。多くの国で米軍は重

大な汚染情報を開示し始めて

いる。しかし最強の「同盟国」

日本では、米軍は費用の負担

もなければ、極めて危険な事

故や汚染情報も隠蔽され続け

ているという。

講演後には化学工学の学

生、ベトナムの留学生ほか次

々と質問が出て、満員のホ

ールは世界と向かい合う深い場

となつた。より良き未来へ、

高度な専門性と高い社会的意

識が交わる場へ。大学の挑戦

は続く。

読書日記

昨年から文部科学省の中央教育審議会の委員を務めていた。「中央教育審議会、大学分科会、将来構想部会、制度・教育改革ワーキンググループ」という、全体から見ると末端の一員だが、それでも十六人の委員に大学学長が四人もいたら、鋤々たる方々の集まりだ。慣れない場に招かれて、わざと人の心が動かないように話すかのような官僚口調とか、最初はカルチャーショックの連續だったが、一年間で既に十八回も開催される中で、毎回毎ものすごく勉強になっている。

文部科学省は最悪の時期だ。幹部たちのあまりのていだらしく国民は心底呆れいる。省全体が腐りきっていると思ってしまうかも知れないでも一言言つておきたい。中堅や若手にはほんとうに「この国の教育を良くしたい」と感じ、行動している人たちがいる。いま一番慣っているのは彼らだろう。驚かされたのは、委員たちの「熱さ」だ。細かい案件が次々と提示される中、その問題点をどんどん指摘する。十

年以上も関わっているような古株の委員たちも、「昔からまさかこんなものが出てくるのか」といった苛立ちを隠さない。委員の人たち



大人の学びを考える

もマジで「この国の教育を良くしたい」と心の底から思っているのだ。委員たちの近著を読んでみると、一冊目は美馬のゆりさん

が編者のひとりになっている『学習設計マニュアル』『おとな』になるためのインストラクションナルデザイン』。学ぶことなど「〇〇を学ぶ」と

いふどりうがなにか自分自身で学ぶ目標を定め、学びの環境を整え、学びをデザインすることだ。学びの深さを考え、学ぶ場をつくる、仲間と力を合わせる

筆者

上田紀行さん

*7月31日～8月27日



■学習設計マニュアル 「おとな」になるためのインストラクションナルデザイン (鈴木克明、美馬のゆり編著・2018年) 北大路書房・2376円
■アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性 (溝上慎一著・2018年) 東信堂・1080円

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長著書に「日本型システムの終焉(しゅうえん)」「かげがえのない人間」ほか。

業の基本形と生徒の身体性」。アクトイブラーニング型授業の基礎形式の授業から、従来の講義形式の授業から、

られない、そういうものを不可逆的な出会いといいます。そのリストを作つてみよう。なんという課題にどう取り組む。大学生向けに書かれているけれど、人生百年時代、むしろ「おとな」が読むべき本だ。キャラアップのためににはビジネス書を読むよりこの本を読んだほうがいい。もう一冊は溝上慎一さんの

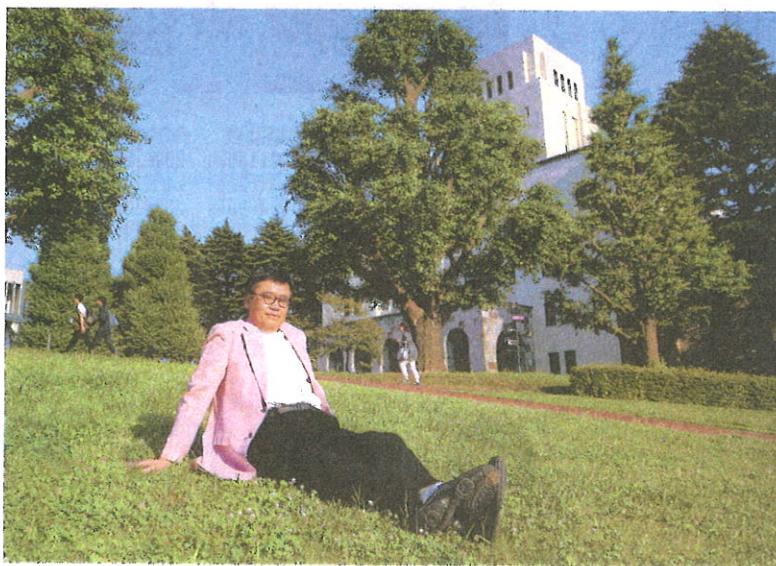
刺激し合いながら自ら学ぶという主体性をもった身体性へといかにシフトするか、この本には全国各地の学校現場での具体的なノウハウが溢れている。そして巻末には三十人の先生方の顔写真入りのコメントが。それはひとりひとりの顔の見える教師が変わり、リードしていくかないと何も変わらないという大きなメッセージだろう。

学びの場づくりが大切。刺

グループワークやディスカッションへの転換は、東工大の教育改革の柱だし、全国各地の中学校、高校でも進行しつつある。しかしこれがなかなか難しい。単なる雑談の場になつたり、一部の生徒だけが取り組み、他は力オススメ状態だつたり。生徒が講義形式での受動的な身体性から、仲間と

讀書日記

ところが哲学も大学入試問題になつてゐる。センター試験の「倫理」、平成29(2017)年度の受験者数は英語の54万人に比べれば少ないけれどそれでも約2万人いる。でもその数では「でる哲」は売れないのではと心配になるけれど、実は心配で無用。この本は受験参考書ではなくて、「センター試験の過去問解説題を解きながら、ソクラテスからハイデガー、ウィートゲン



II 東京都目黒区で、玉城達郎撮影

うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「生きる意味」「人間らしさ」ほか。

ベーコンさん、これは「洞窟のイドラ」でしょうか？スピノザさん、ぼくははたして自由なのでしょうか？

まつとうな哲学入門書

なものを、次の①～④のうちから「一つ選べ」といったものだが、これがいい。哲學書をぼんやり読んでいると、「プラトンはこう言った」となんか分かって気になるけれど、問題に對面すると、①～④の中にはプラトンでないものが三つあって、それとの対比で

プラトンが言つたことがものすごく分かる。

入試問題とはいえ、哲學の深さに直面してしまう瞬間も多々ある。「次の文章は、スピノザが自由について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、①～④のうちから一つ選べ」の

や考えさせられてしまう。
難しい哲學問題を入試問題にする作問者たちの工夫にも、感心させられる。「ベーコンの『劇場のイドラー』に囚われているのは誰か」の問い合わせの後に4人家族が会話する。「（前略）母‥わたしたちのふだんの生活では、イデアなんて

*8月28日～9月24日

The image shows the front cover of a Japanese philosophy textbook. The title '試験に出る哲学' is at the top in large characters, followed by the author's name '岩波哲也'. Below the title, it says '岩波新書' and 'Iwanami Shoten'. There is also some smaller text at the bottom.

■試験に出る哲学 「センター試験」で西洋思想に入門する（斎藤哲也著・2018年）
NHK出版新書・929円
西洋思想の基本を「センター倫理20問」に挑戦しながら学び、哲学の奥深さと面白さを知る。

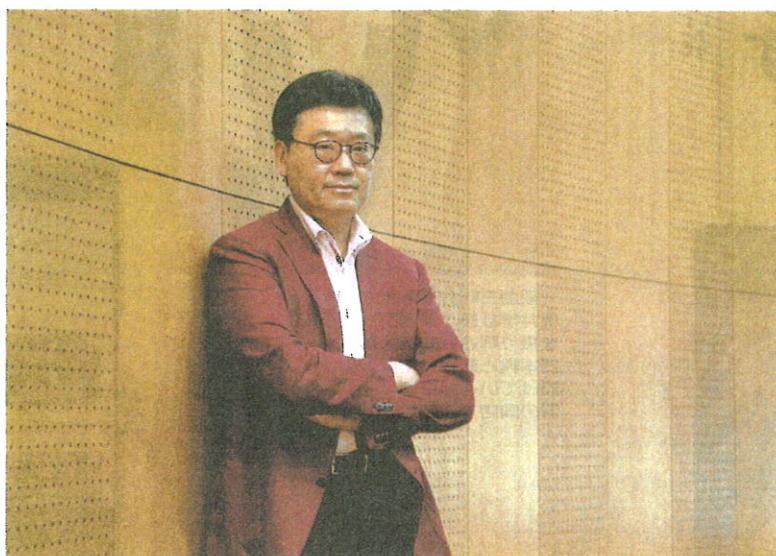
読書日記

未来社会DESIGN機構
という新たな組織を大学で立ち上げることになった。「世界最高水準の教育研究活動の展開が相当程度見込まれる」として文部科学省が指定した五つの「指定国立大学法人」(東北大、東大、東工大、名大、京大)のうち、東工大の目玉の一つがこの組織の創設だ。

科学者・技術者は自分の研究に没頭し、社会の未来像までは手が回らない。しかし科学技術がここまで大きな影響力を人間と社会に与えている時代に、理工系の大学こそが未来社会を提示し、実現するハブになるべきではないか。となればまず読むべき本は、「テクノロジーとサピエンスの未来」とサブタイトルされた、ユヴァル・ノア・ハラリの「ホモ・デウス」だ。

あの「サピエンス全史」の著者による、人類社会の未来予測である。骨子だけを簡単に紹介しよう。

飢餓、疫病、戦争という人類史の三大苦難を克服した人類が今後向かうのは、不死と幸福を求める道だ。それらをかつて提供していた人間は、そのことによって逆にコンピューターや人工智能(AI)に負け



筆者は
今週の

文化人類学者
上田紀行さん

*9月25日～10月22日



未来社会への警鐘

てしまい、人間の心も計算処理システムとして解体され、人間至上主義はデータ至上主義に取って代わられる。AIとデータ処理が至上となり、人間はそのシステムに従属する存在へと落ちていく。そして一握りのデータ至上主義エリートと、その転換について

いけない大多数の人間との格差は限りなく拡大していく。人類学者として読むと、この本は果たしてエキサイティングだ。ぼく自身、人類のプログラミングに潜む陥穀を研究しているが、人間を世界の王たらしめてきた能力が一転して人間を支配される存在へと

貶めていくことを、これだけ知的興奮呼び覚ましながら展開する様に、読みながらワクワクさせられる。AIとデータ処理が第二章で人間の動物支配の歴史を詳述したのはなぜか。雌アバタたちが一頭一頭身らしめてきた能力が一転して動きができないケージに押し

河出書房新社・各2052円
著者はイスラエル人歴史学者。「サピエンス全史」は世界で800万部を超えるベストセラーとなった。

■ 東京都墨田区で、玉城達郎撮影

筆者は上田紀行、津村記久子、平田オリザ、西垣通の各氏です。

込まれ、人工授精、妊娠、出産を繰り返して子豚を生産させられ、役目が終わると食肉処理されるという、人間が動物に行っている酷い仕打ちが、こんどはAIとデータ処理システムによって、人間に行われるようになる、お前たちはある雌アバタのように支配されるのだ、という警告だ。

ひとりの人間として、そしてこれから世界を生きていく子どもたちの親として、ここで提示された未来社会はどうして受け入れたくない。

しかしこのムカムカするような未来社会像は、逆にぼく

一神教的観念から遠く、「不死」への執着も西洋に比べて薄い。そしてこれから訪れる「多死時代」において、「不死」以上に「介護」や「看取り」と向き合うことになる。西洋由来の科学技術をここまで発展させつつ、なつかつ「共生苦」や「死者との共存」「自然との連続性」「調和・思いやり」といった「デウス」的でない文化を保持し続けていく日本の強みが今こそ發揮されるべき時だろう。

「デウス」を目指す社会からの要請と研究資金だけに応じては、悲劇が待つ。より善き人間の欲望と科学技術が導く未来社会DESIGNへと、ぼくたちはその気概をもって進んでいきたい。

讀書日記

広島の吳に講演に招かれ、翌日に瀬戸内の島巡りを乞うて内いただいた。下蒲刈島、上蒲刈島、豊島、大崎下島、岡村島といふ島の名前も、それらを七つの橋で結ぶ「安芸灘とびしま海道」の存在も知る人は少ないだろう。しかしそれはめぐるめぐ至福の一日前だった。

A color photograph of a man from the waist up. He is wearing a light pink, single-breasted blazer over a white turtleneck sweater. He has dark hair and is wearing glasses. He is standing in front of a large, textured wall made of grey stone blocks. The lighting suggests it might be late afternoon or early evening.

この本は東日本大震災の画景で始まっている。いつも通る道端に漁船が打ち上げられる。数万年前の地層が現れる。全村避難した村はイノシシ・サルのみかとなる。時間は切斷され、古代の時間が現れ

「風景」とはその意味で私たち「人間」を映し出すものだ。どうか、瀬戸内での至福感からこの「風景論」に誘われたことも、ぼくにとって新たな風景にも開かれたことなのだ。

の中で生活している。でもも
慣れた風景は半ば意味が固定化してい
る。駅のホームでは時刻表示を見る。
食堂ではメニューや料理を見る。絶景地
では美しい風景を見る。見慣れた風
景、意図された風景では、みな一つのレイヤー（層）を見
ている。でも見知らぬ風景
はそれをぐらつかせる。

載た。それも鮮やかに風景を切り取るカラー写真が68点も掲載されているから、ページをめくっているだけでほんたちはその風景と、そこに明滅する無数のめぐるしく世界に連れ去られてしまう。でもほんどの写真には人間や人間が作りだしたもののが映り込んでいる。それは現代が「人新世」つまりかつて大噴火や地層の隆起が地球にもたらしたような変化を、まさに人類が起こしている地質年代なのだと、いう認識が反映しているのだろう。

見知らぬ土地が映す人間

季節で緑とオレンジのコントラストが鮮やかだ。そしてひとつひとつ島に個性があり、歴史がある。展望台に立てば、「ひとしま海道」のみならず、対岸の四国が、そして今治から尾道へと続く「しまなみ海道」の島々も望むことができる。瀬戸内の美しい風景に、古代からの歴史、そして人々の営みが重なり合い、言葉では言い尽くせない、アリティー、至福感が湧きあがってきた。ぼくたちが旅をするのは、そんな風景に出会うためなのかも知れない、と深く感じたとき、港千尋著「風景論」

のものすごくインパクトのある表紙を思い出した。美しい海水浴場に立ち並ぶ風力発電機の風車。そしてその表紙の裏には「なぜ私たちは見知らぬ土地を歩き、風景を訪ねるのか?」とクレジットされていて、見知らぬ土地、というのがミソだ。ぼくたちは毎日風景

野生が出現する。そして目に見えない放射物質もまた風景となる。見えるもの、想像するもの、測定されるもの、現在、過去、未来が風景の中にはある。それらを呼び覚ますものが風景なのではないか。……と著者は訴えかける。

筆者

文化人類学者

*10月23日～11月19日



■風景論 変貌する地球と日本の記憶（港千尋著・2018年）
写真家であり著述家である著者が国内外を歩きながら、「風景の生成過程」を考察していく。

読書日記

久しぶりに訪れたブラジル・リオデジャネイロで「ファヴェーラ(貧民街)・ツアーア」に参加した。人口600万超の大都市リオの4分の1はファヴェーラに住む。中心街には高層ビル、コパカバーナやイパネマの風光明媚な海岸にはホテルが建ち並ぶ。しかしそんな華やかな観光地から少し丘を上ればそこは山肌に無数の小さな家々がへばりつくように建ち並ぶスラムだ。

ファヴェーラは犯罪の温床と言われてきた。窃盗、強盗、傷害、殺人は丘から下りてきる犯人を引き起こし、そこは麻薬組織の巣窟でもあるという一般的のイメージだからこのツアーが流行っていて、いくつものツアーカンパニーが毎日貧民街にツアーアを出していることを聞けば皆驚くにちがない。

選んだツアーアはNPO主催で、ガイドもファヴェーラの居住者だ。急な斜面に密集して建てられた家の間の狭く曲がりくねった道を下りていく。上を見上げれば電柱から家々に沿って電線が黒々と絡まり合つ。ゴミが道ぼたに積み上がり臭氣を放つ。リオの観光地ではぜつたいに見られない風景だ。ただアジアの街中も歩いてきて、そのゴミゴミ感は見慣れているところもある。問題はこの風景 자체

筆者
今週の
題

文化人類学者

上田紀行さん

*11月20日～12月17日



■貧困と連帯の人類学 ブラジルの路上市場における一方的贈与（奥田若菜著・2017年）
春風社・3996円
ブラジリア近郊の貧民街で生活する路上商人たちの贈与のあり方を描き、連帯の作法を探る。

人との結びつきを強める

「どうより、この街並みと外部の格差、そして教育や仕事における埋められない大きな溝にあるのだと強く感じた。

「住んでる人間にどうっては安全な街なんだ」「ほとんど人間にとって麻薬なんて関係ない」「みんな眞面目に暮らしてる」「だけが外との格

差は開くばかりだ」というガードの言葉が耳に残る。そんな貧困の中人々は何を支えて毎日暮らしていくのか。そのことを知りたくて、首都ブラジリアの近郊の貧民街での調査に基づく、奥田若菜著「貧困と連帯の人類学」を手に取った。

北東部から数百キロも離れた首都近くに出てきて路上で物を売る人々の話だから、リオのファヴェーラとはちょっと違っただけかもしれない。ただ驚かされたのは多くの人たちが「働き者」であることに誇りを持ち、樂して收入を得ることは

「正しさの規範」に反していふと考へていることだ。働くうにも職がない貧困地帯とは違つて、都会では公平な市場原理があるから、眞面目に働くべき、「汗をかいた力」を貯めれば貧困から脱出し、社会的に上昇できるはずだと強く信じている。だから彼らは詐欺師や泥棒を心から軽蔑する。みんなすごく勤勉で眞面目な人たちなのだ。

他方で難族や困った他者を助けるために贈与し合う。それを「伸びるカネ」と呼ぶ。仲間を助けること、それは善

えだ。のりゆき 東京工業大学リベルアルアーツ研究教育院長著書に「スリランカの悪魔祓(ばら)い」「生きる意味」ほか。

筆者は上田紀行、津村記久子、平田オリザ、西垣通の各氏です。

読書日記

今年最初の「読書日記」にふさわしい面白い本はないかな?と同僚教授に言ったら「いま届いたこの本はぜつたいお薦めですよ」と差し出された。え、「自殺会議」って?

「この末井さんって、小学生の時お母さんが体にダイナマイト巻き付けて男と心中しちゃったんですよ。それで彼はその後工口本の編集者として有名になり、いまは自殺した人の家族とかを訪ね回っているんです」

何かすごい本だということは分かった。でも自殺についての本だからちょっと身構えて読み始めると、「なぜ自殺のことを書くのか」というと、たぶん自殺する人が好きだからだと思います」という文章にぐくわす。力が抜けたひょうひょうとした語り口にたちまち引き入れられてしまう。

自殺を論じるといふとどこか振りかぶって力が入っててしまう。この力の抜け方はただのではない。末井さんは「自殺」に縁があると聞くと、その人に会いに行きたくなり、訪ねては対話を積み重ねていく。フットワーク軽く出会つていいその人たちがみんなたるものでない人たちなのだ。

漫才コンビ松本ハウスのハウス加賀谷さんは統合失調症で自殺未遂者もある。作家の岡映里さんはお母さんを飛



人に優しい社会とは

なんて質問はふつうはできな
い。でも自殺未遂の人はその
時の自分を語り出し、親に死
なれた子どもも、子どもに死
なれた親もナチュラルに語り
出す。「自殺」を語りながら、
語られる言葉の「生き方」が
すごい。

そして自殺を止めようとしている人たちはその方法は各
人で違えど、その体当たりの
熱意とエネルギーがすごい。
ほくが『自殺社会』から『生き心地の良い社会』へ』(講
談社文庫)で対談した自殺防
止NPO代表の清水康之さん
もそうだったけど、結局のと

うえだ・のりゆき 東京工業大リベルアル・アーツ研究教育院長。著書に「生きる意味」「か
けがえのない人間」ほか。

筆者は上田紀行、津村記久子、平田オリザ、西垣通の各氏です。

今年最初の「読書日記」にふさわしい面白い本はないかな?と同僚教授に言ったら「いま届いたこの本はぜつたいお薦めですよ」と差し出された。え、「自殺会議」って?

「この末井さんって、小学生の時お母さんが体にダイナマイト巻き付けて男と心中しちゃったんですよ。それで彼はその後工口本の編集者として有名になり、いまは自殺した人の家族とかを訪ね回っているんです」

何かすごい本だということは分かった。でも自殺についての本だからちょっと身構えて読み始めると、「なぜ自殺のことを書くのか」というと、たぶん自殺する人が好きだからだと思います」という文章にぐくわす。力が抜けたひょうひょうとした語り口にたちまち引き入れられてしまう。

自殺を論じるといふとどこか振りかぶって力が入っててしまう。この力の抜け方はただのではない。末井さんは「自殺」に縁があると聞くと、その人に会いに行きたくなり、訪ねては対話を積み重ねていく。フットワーク軽く出会つていいその人たちがみんなたるものでない人たちなのだ。

漫才コンビ松本ハウスのハウス加賀谷さんは統合失調症で自殺未遂者もある。作家の岡映里さんはお母さんを飛

び降り自殺で亡くなり、十数年後に自分もベランダを乗り越えようとして、飼い猫に止められる。映画監督の原一男さんは、中学生の息子を叱つた。え、「自殺会議」って?

「この末井さんって、小学生の時お母さんが体にダイナマイト巻き付けて男と心中しちゃったんですよ。それで彼はその後工口本の編集者として有名になり、いまは自殺した人の家族とかを訪ね回っているんです」

何かすごい本だということは分かった。でも自殺についての本だからちょっと身構えて読み始めると、「なぜ自殺のことを書くのか」というと、たぶん自殺する人が好きだからだと思います」という文章にぐくわす。力が抜けたひょうひょうとした語り口にたちまち引き入れられてしまう。

自殺を論じるといふとどこか振りかぶって力が入っててしまう。この力の抜け方はただのではない。末井さんは「自殺」に縁があると聞くと、その人に会いに行きたくなり、訪ねては対話を積み重ねていく。フットワーク軽く出会つていいその人たちがみんなたるものでない人たちなのだ。

今週の筆者は

文化人類学者
上田紀行さん

*12月18日~1月21日



■自殺会議 (末井昭署・2018年)

朝日出版社・1814円

自殺未遂した人や自殺しようとしている人を救おうとする人、自殺を主題に絵を描く人など、自殺を巡る人々を著者が訪ね、話を聞く。

このその人間としての「熱さ」

と登場する。

母親がダイナマイト自殺したという「自殺仲間」だから

近接していながら自殺が多く

い村とほとんどない村の両方

を未井さんは訪ねる。片方は

山間の勤勉な村で、自分への

プライドが高く、困っても人

に相談しない。もう片方は海

で、自分の携帯番号を公開

して「いのちの電話」を開設

し、「死にたい」という人た

とまで語り続ける。「自殺の名

所」東尋坊で体を張って自殺

を止め続けている元警官の茂

幸雄さん、筋ジストロフィー

の詩人、岩崎航さん……。と

いでもな、濃い人たちが次々

ていいのかなんて線がほとん
どない。「息子さんが飛
び降りる瞬間って怖いでしょ
うね。よくやったというか」

と登場する。

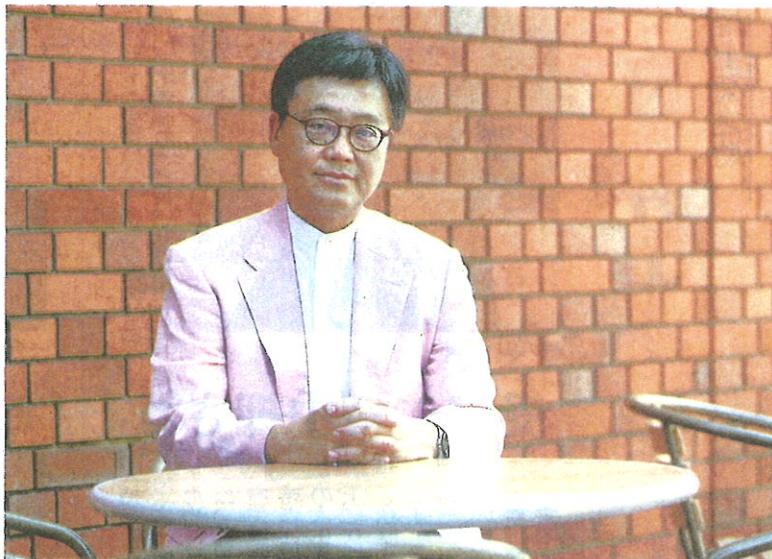
「本気さ」が届くのだと実感

させられる。

讀書日記

それはもう一生変わらないんじゃないとか、そういう響きがあつて、実際にやるせなかつた。まだ20歳前の若者だというのに。
どうしてそうなるんだろう？
彼の推薦する杉田俊介著「非モテの品格」を読んでみ
ど。

副題は「男にとつて『弱さ』」



うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「生きる意味」「人
生の△逃げ場△」ほか。

発表した学生のやるせなさは分かってきたけれど、でも人間的にとても魅力がある彼の自己像が「非モテ」という言葉だけでいいのか、複雑な気持ちになる。自己洞察の踏み台としての言葉ならばいいんだけど、やっぱり違和感は消えないなあ。

いる。いわば「物心両面」で「男であること」は危機に瀕して、そこにさらに「恋愛のトラウマ」が襲いかかる非モテの第一段階は「いろいろな女性からモテたいがモテない」、第二段階は「自分の好きなひとりの女性から愛されたいが愛されない」「そして第三段階は「非モテがトラウマ化し、人格の一部となって、いつも非モテ意識に苦しめられること」だという。そ

持っている自分、自己嫌悪でいる自分を「自己尊重」はできないのではないかと言ふ。言つてはいることはものすごく分かるのだけど、そもそも「そんな自己嫌悪ばかりしてないで、『弱さ』だって自分自身の魅力だよ。パワーの源泉だよ」とか言いたくなる。绝望が足りずにポジティブ思考で走ってしまう「弱い」人間だと思われちゃうかもしれないけれど。

「自己嫌悪」のやるせなさ

会的な男性優位性に気づいた男性は、罪悪感や自己批判の苛まれ、自己嫌悪に陥っていいく。でもその自己嫌悪を表出できないという辛苦さ。さらに、「男は女と子どもを養うものだ」といった旧来の「男らしさ」も今や実現が難しくなり、男性の自己想像は社会的にもクライシスに陥ってしまつことをさらに嫌悪する轟地獄へと落ちていく。うん、これは痛すぎる。

女性を「女らしさ」に異性を男らしさに縛りつける社会を単に批判しても、自分自身に対する「自己嫌悪」が深すぎて、解決にはならない。著者はそこで「自己肯定はとてもできないけれど、弱さを

「非モテの品格 男にどうて『弱さ』とは何か」(杉田俊介著・2016年)集英社新書・8321円
「『孤独の永久凍土』を溶かすレッスン」とうたふ一冊。現代の男性の新たな生き方を探る。

今週の筆者は

化人類学者

*1月22日～2月18日

非モテの品揃
か

読書日記

「グローバル人材」という不思議な和製英語が世に出でてかなりの時間が経つ。世界の文化や価値観の多様性を認識し、豊かなコミュニケーションを築く。「だけど」「人材」という言葉にはいつも「ビジネスで金儲け」というにおいがつきまとう。カネの話になるのが、日本人が「グローバル」になれない「因ではないのか」。

この頃痛感させられるのは、昨日の日本が世界に影響を及ぼす思想家を輩出していないことだ。文学ならば三島由紀夫、村上春樹等の有名作家がいる。ポップカルチャーならばマンガとアニメだ。でも「思想」はどうだろう?

思想などは現代では意味がないと言う人もいるが、決してそんなことはない。文化の厚み、深さはとても大切で、偉大な思想家は一目置かれ、彼らを生んだ文化や集団には敬意が払われるのだから。

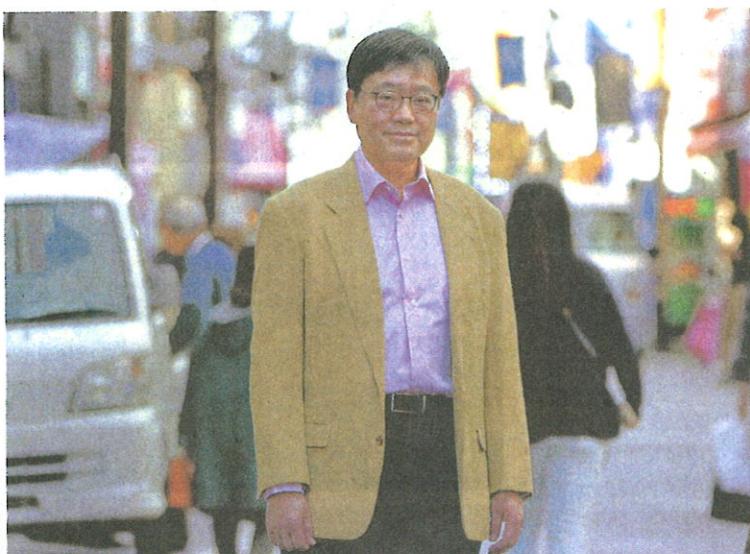
世界が知る日本の思想家は誰かと遡れば、やはり鈴木大拙(1870~1966年)に行き着く。大拙がいなければ日本の禅と禪文化も世界に知られず、「Zen」として世界に広まることはなかった。スティープ・ジョブズだって生まれていなかつたかもしれない。21歳で上京して学問と参禅の道に入り、27歳で渡米して12年間出版社で編集の仕

事に携わり、英語の達人となる。それからの英文での著作の数々、そして数限りない講演が人々の心をつかんだ。

「日本の靈性」とかは昔読んだけど、「グローバル人」としての大拙を何冊か読み直してみた。

大拙の思想家としての迫力の核心は、それが日本文化の

「グローバル人」としての大拙



■ 東京都墨田区で、山下浩一撮影

筆者は上田紀行、津村記久子、平田オリザ、西垣通のうえだ・のりゆき 東京工業大学グローバルアーツ研究教育院長。著書に『覚醒のネットワーク』『ダライ・ラマとの対話』ほか。

「自由の本質とは何か。これをきわめて卑近な例で言えば、松は竹にならず、竹は松にならずに、各自にその位に住すること、これを松や竹の自由といつてある」(「東洋的な見方」)

松が松になり竹にならないのを「不自由」だとするのが普通の客觀的な考え方だが、松はその本性としてその自由性で自主的に松になる。これを天上下唯我独尊ともいいうが、松は松として、竹は竹として、山は山として、河は河とし

て、その拘束なきところを、自分が主人となって、働くのであるのである。「(禅)智は主とならぬ。ぼくうーん、かっこいい。ぼくはもうしてあんな人にになれないのであるから仏教は、仏陀の「悟り」に基づくその教えを、弟子たちがただ聴き呑みにすればよいというようなものではない。それは弟子たちがそれぞれ

紹介であるとともに、「自分がそれを体現する」という強い意志に満ちていることだ。

「悟り」は、めいめい自分が人々の心をつかんだ。

「日本的大拙」は、大拙としての大拙を何冊か読み直してみた。

大拙の思想家としての迫力の核心は、それが日本文化の

「禅」は英文論稿の新編集、「東洋的な見方」は最晩年の論文集。

今週の筆者

上田紀行さん

*2月19日~3月18日



■ 禅(鈴木大拙著、工藤澄子訳・1987年)
■ 東洋的な見方(鈴木大拙著・2017年)
■ 駒川ソフィア文庫・734円
■ 「禅」は英文論稿の新編集、「東洋的な見方」は最晩年の論文集。

て、その拘束なきところを、自分が主人となって、働くのであるから、これが自由である」

「悟り」は、めいめいが自分で体験しなければならない。だから仏教は、仏陀の「悟り」に基づくその教えを、弟子たちがただ聴き呑みにすればよいというようなものではない。それは弟子たちがそれぞれ

がそれを味わう時に成立するのである」(「禅」)

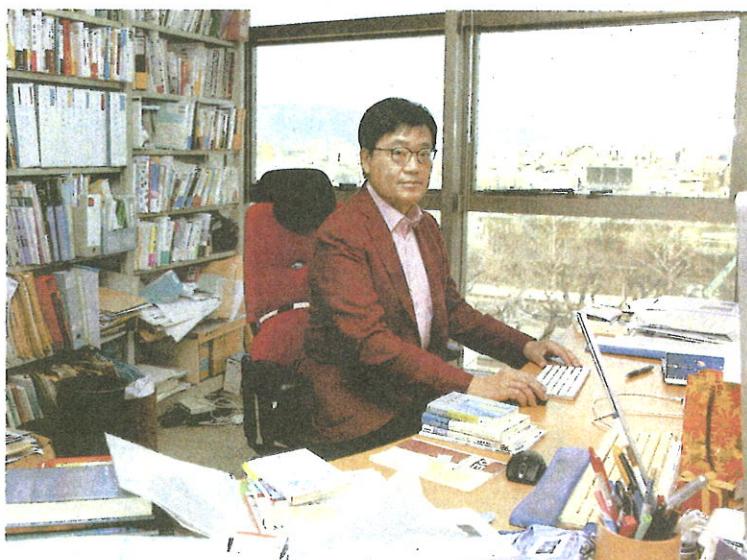
西洋は自古以前の「即非論」、東洋は分別以前の「即非論」、東西は分別以前の「即非の論理」だというところまでならば文化論だが、「自分で悟りを体得する」となると迫力が違う。

「今日の世界が、どうしてこのようになつたか」というに、それは力といふものを重んじすぎたからである。(中略)智の世界の外に悲の世界のあることを全く忘れてしまった。智と悲と両立しなくてはならぬ、というより、智は悲に属して動かなくてはならぬ。智は悲によってその力をもつのだ。悲によつてその力をもつてはならぬ。ほんとうの自由はここから生まれて出る」(「同」)

知利他心なき力の横行。59年前の文章が一周して今も鋭い警句となつてゐる。世界を揺り動かす深い言葉、その深さへの探究こそが現代のぼくたちの課題だ。

讀書日記

にわかには信じがたい話だが、実話だ。この名物教師の名前は棚町知彌^{たなまち ちや}、そしてその教え子によるこの評伝が明らかにする彼の人生は美に波瀾^{はれん}万丈、面白さに満ちている。そもそも学生たちの自由な魂を呼び覚ました人気教師は、学生運動の季節となると、「悪法も法だ」と言い放ち、学生の自由な活動を徹底的に抑圧する側に回り、あまりの豹変ぶりで学生たちを深く失望させる。しかしその後新聞記者となつた著者の池田知隆は20年後に再会し、そこか



「三四郎」、杉田玄白「蘭学事始」、幸田露伴「五重塔」、福沢諭吉「福翁自伝」、島嶼藤村「破戒」等々を名物教師が読み聞かせをする。中学を出てての若者たちはその名調子に魅了され、本の世界に吸い寄せられていく。学生たちもさばるように本を読むようになり、図書館のほとんどが本は貸し出し状態になるのだった。

1960年代の九州、創設されたばかりの高専で、ものすごい国語教育が急されていった。高専とは高等専門学校、ロボコン人気で一般にも広く知られるようになった、理工系バリバリの5年制の教育機関である。「キューリー夫人伝」に始まり、矢内原忠雄の「余に尊敬する人物」、夏目漱

らの交流から生まれたのが
「読書と教育」だ。
棚町の父は戦前の「思想検
事」、政府に反対する者を徹底
的に弾圧する職務であり、大
本教の弾圧の中心人物でもあ
る。その息子の知彌はエリー
トとして育ち、典型的な「皇国
少年」の優等生として旧制高
校の卒業式でも締合となる。

そして44年に北海道大数学部に進み、役場から理学部の学生は徵兵猶予と言われたのに自ら志願して出征する。それはまさに國のために死んで済む選択だったが、生きて復員する父は既に亡くなり、家族を養わなければいけない。そこで彼は何とGHQ（連合国軍司令部）に就職する。昨日

までの軍国青年が英語の能力を活かして米軍に、それも検閲官として採用され、もっぱら演劇を検閲した。ところがそこで民衆の旺盛な演劇活動に感動し、演劇誌を自ら創刊。検閲局が廃止されるごとく、米系石油会社に勤めながら九州大の国文科に入学して、近松文学生を研究する。

教えるのでなく、技術者に教えることを学生に教えるべきだ」という言葉に出会い、ハーバード、MIT（マサチューセッツ工科大）、オックスフォード、ケンブリッジなどの図書館を視察して、そこが文化やアートの拠点となっていることを知り「人文・社会科学をいかに工学と統合するか」

筆者

人類学者

*3月19日～4月15日



■ 読書と教育 戦中派ライブ
跡（池田知隆著・2019年）

名作を読み聞かせ、生徒を本の世界へいざなった伝説の教師の評伝。読書が人生に与える力を知る。

振れ幅の大きな名物教師

そして工業高校に国語教諭として着任し、61年に高專制度が発足すると高専教員となり、徹底した読書による教養教育を開始した。さらに学生紛争後は、高専の教育改革に没頭する。アメリカ工学教育学会で「工学教育とは技術を

この振れ幅がすごい。エリート軍国少年、数学科、出征、GHQ検閲局勤務、演劇團創刊、国文科入学……。日本人は「目の前の当面のこと」に全力あげてとりくむのが私の悪いクセ」と言っているが、それについても。

までの軍国青年が英語の能力を活かして米軍に、それも検閲官として採用され、もっぱら演劇を検閲した。ところがそこで民衆の旺盛な演劇活動に感動し、演劇誌を自ら創刊。検閲局が廃止されるごとく、米系石油会社に勤めながら九州大の国文科に入学して、近松文学生を研究する。

教えるのでなく、技術者に教えることを学生に教えるべきだ」という言葉に出会い、ハーバード、MIT（マサチューセッツ工科大）、オックスフォード、ケンブリッジなどの図書館を視察して、そこが文化やアートの拠点となっていることを知り「人文・社会科学をいかに工学と統合するか」

読書日記

水俣(熊本県)を初めて訪れたのは4年前のことだ。ナレーブな高校生時代に土本典昭監督の映画を見て打ちのめされてから、長年多くの活字とニュースと付き合い、水俣支援の甘夏を購入したりもしたが、生平可な気持ちでは到底行けず、水俣病関係のシンポジウムのご縁でやっと訪れることができた。

不知火海の美しさにうたれた。この美しい海が水銀に汚染されたとは。海の幸が毒に変わり、毎日魚をどんどん山盛り食べていた漁師の人たちがまっさきに「奇病で」くなっている。

原因企業のチッソの正門は水俣駅の目の前だ。日本中のエリートが結集するかつての巨大国策企業の威容は今でも感じることができる。水俣の経済活動を一手に担い、市民の誇りである超エリート企業と、最貧層の漁民たちの間のかつての果てしない社会的距離も、訪れてみて痛いほど実感された。

市立の水俣病資料館とともに、市民団体である水俣病センター相思社が運営する水俣歴史考証館も訪れたが、そこでお話を聞かせてくれたのがこの「みな、やつの思いで坂をのぼる」の著者、永野三智さんだった。患者も多い地域に生まれたが、水俣出身であると言えず鹿児島出身と

筆者は
今週の筆者

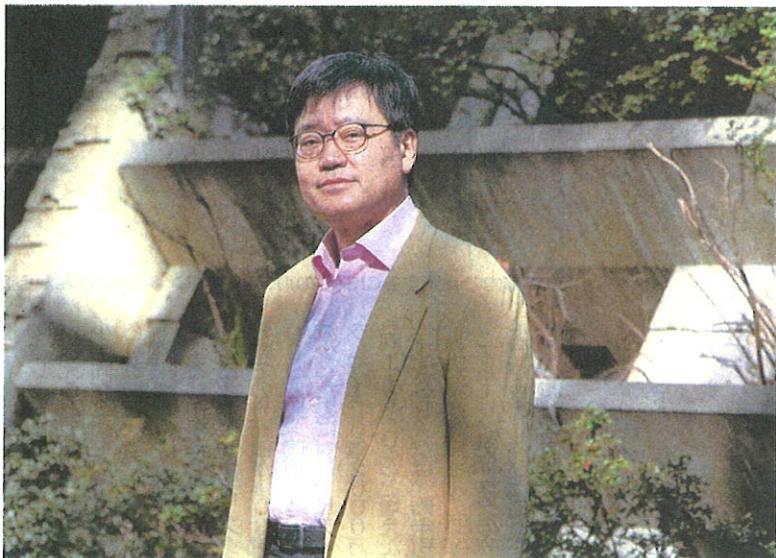
文化人類学者
上田紀行さん

*4月16日～5月20日



■みんな、やつの思いで坂をのぼる 水俣病患者相談のいま(永野三智著・2018年)

水俣病の患者との相談を受ける著者の記録。「科書の中の物語ではない」水俣病を知る。



東京都墨田区で、山下浩一撮影

「悶え加勢」痛みに寄り添う

言つて熊本でバイトをしていたら、同じように出身を偽っていた実のお姉さんに会った。とか、10代で出産して子どもを連れて世界放浪旅行に出で、各地で居候やテント生活をしていたが子どもから私も家に住みたい」と言われて水俣に帰ってきたとか、まだ30ちょっと過ぎなのにたいへん

んな振れ幅の人生をひょうひょうと語る姿に引きつけられた。相思社は患者相談窓口を開設しているが、そこを訪れた患者さんたちの語りを集めたこの本を読むと、水俣病はまったく過去のものではないことを再認識させられる。認定患者はこれまで約2500人だが、認定を求めている人も約2000人いる。また水俣病の症状が年とともに顕在化していく人もいるし、以前から症状はあってもそれを水俣病と言い出せなかつた人たちも多数相談にやってくる。

水俣病患者はチッソに迷惑をかける者、水俣のイメージ

を悪ぐする者として差別を受けてきた。被害者が差別されるという歪んだ構造の中で、患者は二重の苦しみに耐えてきたが、患者の中にも「チッソに申し訳ない」という思いを持つ人もいて、複雑だ。しかし2009年に水俣病特措法が施行され、未認定患者にも一時金や療養手当が支給されるようになると、それまで患者を差別していた人々の中からも申請者が相次ぐことになる。

そんな引き裂かれた状況の中で、相談に訪れる人たちはうえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長著書に生きる意味「人生のへ逃げ場」ほか。

他のところでは決して語れなかつた思い、それは聞いてくれる人がいて初めて語り出される。「聞く」ことの有り難さを思い知らされる。しかし聞き続けるのも辛いだろう。永野さんは「患者の痛みを前に何もできない自分が不甲斐ない、泣きたくなる」と石牟礼道子さんに言ったことがある。石牟礼さんの妻は、「悶え加勢すれば良かっです」「ただ一緒に苦しむだけで、その人はすこし楽になる」。

この本には泣きたくなるような辛い話も多いけれど、でも元気も湧いてくる。「悶え加勢」、その言葉で高校生時代のぼくもほんとにすこし樂になつた。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

やつとの思いで語り出す。二年後も水俣病の症状で悩んでいた娘に、母は自分も水俣病とは言い出せない。二人とも水俣病だなんて慘めすぎるという。状況に悩む勇たちも多数相談にやってくる。

水俣病患者はチッソに迷惑をかける者、水俣のイメージ

はなれないという。

これから・1944円
十数年も水俣病の症状で悩んでいた娘に、母は自分も水俣病とは言い出せない。二人とも水俣病だなんて慘めすぎるという。状況に悩む勇たちも多数相談にやってくる。

水俣病患者はチッソに迷惑をかける者、水俣のイメージ

読書日記

「測りすぎ」という言葉を聞いて、「そうだー」とぐぐつと心をわしづかみにされてしまうあなたはぼくのお仲間だ。そんなあなたはいろいろなところにいる。会社、病院、お役所、インターネット、学校、そしてぼくがいる大学の世界。「測定する」のは決して悪いことじゃない。だけど明らかに「測りすぎ」なのだ。いつからこんなになってしまったのだろう。昔だって組織にせよ個人にせよ業績は測定され、評価されていた。でも今のように年がら年中、評価する、されるための書類を書いたり、提出したりして、評価のための時間ばかりが増大し、本来の生産的、創造的な仕事の時間がどんどん食われるような状況ではなかつた。測定し、評価するために投じられるコストが大きすぎて、それが逆にわれわれの生きることや社会のありかたを貧困化させているのだ。

社会思想史の専門家である著者は、それが「説明責任」や「透明性」の暴走から来ているという。説明責任とは自己の行為に責任を負うという意味のはずだが、それがいつしか「標準化された測定を通じて成功を見せつける」ことに変わっていた。そして何かの価値を測るために測定するのではなく、大事なものはすべ

り個人にせよ業績は測定され、評価されていた。でも今のように年がら年中、評価する、されるための書類を書いたり、提出したりして、評価のための時間ばかりが増大し、本来の生産的、創造的な仕事の時間がどんどん食われるような状況ではなかつた。測定し、評価するために投じられるコストが大きすぎて、それが逆にわれわれの生きることや社会のありかたを貧困化させているのだ。

「測りすぎ」という言葉を聞いて、「そうだー」とぐぐつと心をわしづかみにされてしまうあなたはぼくのお仲間だ。そんなあなたはいろいろなところにいる。会社、病院、お役所、インターネット、学校、そしてぼくがいる大学の世界。「測定する」のは決して悪いことじゃない。だけど明らかに「測りすぎ」なのだ。いつからこんなになってしまったのだろう。昔だって組織にせよ個人にせよ業績は測定され、評価されていた。でも今のように年がら年中、評価する、されるための書類を書いたり、提出したりして、評価のための時間ばかりが増大し、本来の生産的、創造的な仕事の時間がどんどん食われるような状況ではなかつた。測定し、評価するために投じられるコストが大きすぎて、それが逆にわれわれの生きることや社会のありかたを貧困化させているのだ。



■東京都墨田区で、山下浩一撮影

うえだ・のりゆき 東京工業大学
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「覚醒のネットワ
ーク」「生きる意味」ほか。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

測定への過信脱し創造性を

取りざたされる。学生の投資利益率を見るわけだ。そのスコアを上げるために卒業生を投資銀行やコンサルタントといつた高給取りの職種に送り込もうとするが、しかし高給取りを生みだすことが大学の使命感なのか？芸術、文学に感動する、科学的世界の奥深さや神祕を知るといった、一生涯に影響する深い満足感は測定されない。一生の友に出会う、結婚相手に出会うといふことも測定されない。給料が低くとも公共性が高く、人々や社会に貢献する職種はたくさんあるが、そうした卒

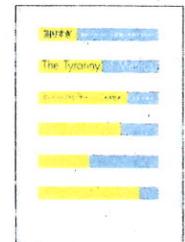
「測りすぎ」とは、多くの項目の短期的な測定によつて、常にせわしなく測定が繰り返されるという疲弊感である。

この本を読んで、モヤしていた霧がちょっと晴れて「それ、測りすぎじゃない？」と言えそうな勇気が湧いてきた。

筆者は今週の筆者

上田紀行さん

*5月21日～6月17日



■測りすぎなぜパフォーマンス評価は失敗するのか？
(ジェリー・エ・ミュラー著、松本裕訳・2019年)
みすず書房・3240円
日常にあふれる数値評価は、はたして生産的なのか。
検証しながら、健全な使用方法も明示する。

読書日記



筆者

文化人類学者
上田紀行さん

*7月16日～8月12日



第二次世界大戦の終戦から74年、戦争の記憶の風化が言われて久しい。しかし終戦13年後生まれのぼくにして、自分は戦争のことを知っているかと言われば自信がない。

周囲の戦争体験者が語っていたので、知っているつもりだったのであって、戦争を知る人が少なくなり、その言説が途絶えようとしている今、若者に限らず、年長世代も戦争の何たるかを再び学ばなければならぬのではないか。

そんな思いにかられている時この「ある『BC級戦犯』の手記」に出会った。A級戦犯については有名な政治家や軍人だし、靖国問題にも関連しているから、誰もがある程度は知っている。しかし「B級戦犯」についてはどうだろか。多くは上官の命令によって捕虜を虐待したり処刑したりした人たちだが、戦後に世界各国での軍事法廷で裁判を受け、約1000人が死刑判決を受けた。

この本の著者、冬至堅太郎は東京商科大(現・一橋大)を卒業し、会社員を4年務めた後に召集され、陸軍主計中尉(のち大尉)に任命した。昭和20(1945)年6月19日の福岡空襲で自宅が焼失し、妻子と父は無事であったものの、母は遺体置き場で見つかる。司令部に帰ると米軍捕虜のB乗組員の処刑を実行する

ところで、冬至は自ら志願して4人の捕虜を斬首する。しかしこの処刑は正式の軍法会議を経たものではないことが後から分かり、彼は昭和21年4月に拘引され、23年10月から裁判が開始され、同年12月29日に絞首刑の判決が下った。巣鴨ブリッジに収容され、多くの仲間が死刑執行されてい

く中で、1年半後に減刑となり、最終的に出所したのは10年後の昭和31年7月である。この本は巣鴨ブリッジでの日記と、減刑後から釈放までの間に綴られた「苦闘記」と題する手記からなっている。

驚いた。そして感動した。これは類い希な「宗教への問い」である。冬至は戦後に元

上官から逃亡するようにすすめられ、それを断り自決する覚悟でいたが、「地元の重病を患う住職から「辛くとも生き抜け。自分のある所を全世界として生きよ」と諭され、死刑に服する決意をする。その瀕死の僧侶との問答からして魂をつかまれる。

巣鴨ブリッジには元陸軍中将、岡田資がいた。映画「明日への遺言」の主人公として知られる岡田は熱心な法華経師と仰ぎ、対話を繰り返していた。「なぜ上官の命令に従つた自分が死刑となるのか」。死を前にし、極限状態の実存に置かれた冬至や死刑囚たちと岡田との問答も緊迫感溢れるものだ。

そして初代の教説師、花山信勝を継いで2代目の教説師となつた田嶋隆純。花山が「全て弥陀に預けて浄土へ」見送っていただけ、「こんな嬉しいことはない」という境地が死刑囚の間に生まれてくる。

冬至は8回にわたって友人

と仏教の救いを説いたのに對して、田嶋は「私も僧侶でありながら戦争に協力しました。私こそ戦争犯罪人です。なのになぜあなたたちだけが裁かれるのか」と言い、死刑囚の助命嘆願運動に邁進する。高名な仏教学者でありながら仏教はほとんど説かなかったが、逆に「先生に最期を

と仏教の救いを説いたのに對

して、田嶋は「私も僧侶であ

りながら戦争に協力しまし

た。私こそ戦争犯罪人です。

なのになぜあなたたちだけが

裁かれるのか」と言い、死刑

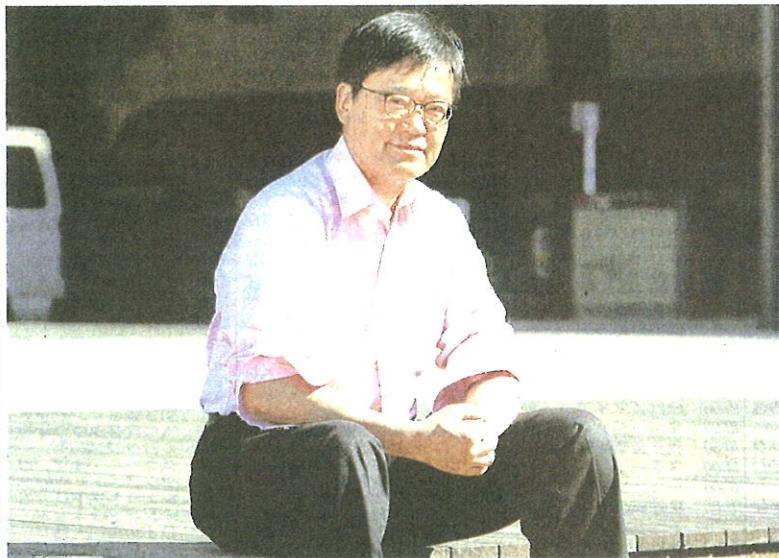
囚の助命嘆願運動に邁進す

る。高名な仏教学者でありな

がら仏教はほとんど説かなか

つたが、逆に「先生に最期を

戦犯の苦しみと獄中の悟り



うえだ・のりゆき 東京工業大学ベラルニアーツ研究教育院長。著書に「かけがえのない人間」「がんはれ仏教!」ほか。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

は東京商科大(現・一橋大)を卒業し、会社員を4年務めた後に召集され、陸軍主計中尉(のち大尉)に任命した。昭和20(1945)年6月19日の福岡空襲で自宅が焼失し、妻子と父は無事であったものの、母は遺体置き場で見つかる。司令部に帰ると米軍捕虜のB乗組員の処刑を実行する

と仏教の救いを説いたのに對して、田嶋は「私も僧侶でありながら戦争に協力しました。私こそ戦争犯罪人です。なのになぜあなたたちだけが裁かれるのか」と言い、死刑囚の助命嘆願運動に邁進する。高名な仏教学者でありながら仏教はほとんど説かなかつたが、逆に「先生に最期を

と仏教の救いを説いたのに對して、田嶋は「私も僧侶でありながら戦争に協力しました。私こそ戦争犯罪人です。なのになぜあなたたちだけが裁かれるのか」と言い、死刑囚の助命嘆願運動に邁進する。高名な仏教学者でありながら仏教はほとんど説かなかつたが、逆に「先生に最期を

と仏教の救いを説いたのに對して、田嶋は「私も僧侶でありながら戦争に協力しました。私こそ戦争犯罪人です。なのになぜあなたたちだけが裁かれるのか」と言い、死刑囚の助命嘆願運動に邁進する。高名な仏教学者でありながら仏教はほとんど説かなかつたが、逆に「先生に最期を

讀書日記

若い頃、ユーリス番組で性障害の人の見聞を見て「気持ち悪い」と言った兄には自分がゲイとは明かせないとずっと思っていたけれど、ある日力ミングアウトしたら「いつからゲイなの?」と聞かれ、「昔からなんだ」と言つたら、「じゃあ、ずっとひとりぼっちだ



近著「カミングアウト」は書かれ、教えられる本だ。自分がゲイやレズビアンだとカミングアウトすること、それはたいへんな体験だとは誰もが想像がつく。でもそこにどんな問題が潜んでいたいへんなのかはよく分かっていない。この本は実際のカミングアウトストーリーが八つ収められ、そこに現れている問題を解説する形で進んでいく。でも八つのカミングアウトストーリーは単なる解説のための「例」ではない。そのストーリーを読むだけで、心が揺さぶられ、泣いてしまいそうになる。

9月から大学の同僚になんた砂川秀樹さんの本を読んでいる。男子学生が8割以上という大学での泣きどころだった「ジエンダー論」の担当教授だ。「新宿二丁目の文化人類学」を著した文化人類学者だけど、自身がゲイだと公表し、長年日本のLGBT運動を牽引してきた活動家である。

今週の筆者

上田紀行さん

*8月13日～9月9日

葛藤し生まれる新たな関係

「たんだ？ 気ついてあらえ
れなくてごめんな。ずっと心
細かっただろ？」と路上で
兄が号泣し、「ずっとこれから
は、俺はお前の味方だから
な」と宣言する。こんな話は
ちらも涙無しには読めない。
気づかされるのは、LGB
Tの葛藤には非LGBTが深
く関わっているという、言わ

れてみれば当たり前のことだ。例えば「異性愛者は自分が異性愛だとカミングアウトしないのに、なぜゲイやレズビアンはするのか?」という問い合わせだ。それは日常行為の中で常に異性愛が前提とされ、ことさらに個人がカミングアウトする必要がないからだ。高校生のおいっ子に「彼女は

「もうできたのか?」と聞いたり、職場でもバレンタインデーに女性職員が男性職員に生理チョコを渡したり。「異性愛前提」の行為が日常には充ち満ちていることに、あらためて気づかされる。

だからカミングアウトされても感はない親は少ない。孫の顔は見られないのか、家は

ケイたといい、でもケイのバーティーに行くと、セックス目当ての人が多くて。ぼくはほんとうに深い話ができる、一生お付き合いできるパートナーを求めているのに」と言った。まだ若かったぼくたちはこの発言に驚いた。この本にも書かれているけれど、ゲイやレズビアンはセックスの

生まれていく。それは、これまで自分自身を隠してきた子どもにも大きな自己信頼感を与えることになる。

読んでいて、思い起こされたぼく自身の記憶があった。高校の後輩が人権運動の仲間たちにカミングアウトした。眞面目な銀行員の彼は自分がうえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。近著に「立て直す力」「愛する意味」。

やったね!とぼくは小躍りした。何かともう誇らしかった。あの時のぼくたちへの力。ミングアウトもひとつきかけだったのだろうか。35年ぶりに会って彼に聞いてみたくなつた。

誰が継ぐのか、といった疑問は親であればまずは当然だろう。しかし、カミングアウトとはその関係の再構築を導くものだという。多くの親は葛藤しながらも、子どもと向き合っていく。その中で子どもを認め、そのパートナーを認めていく中で、新たな関係が

それは力ミミングアウトの障害物にもなる。でも彼も人生をともにできる相手を求めている。という当然のこと気に気づかされた。そしてなかなかいい相手に巡り合えないという彼の悩みに、ぼくたちはとても切なくなつた。

カミングアウト（砂川秀樹著・2018年）
朝日新書・821円

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

讀書日記

ちかしる。元ノーリタ州知事のブッシュも「心理学や哲学といったたいそうな学問を研究しても、将来はハンバーガーショップで働くのが落ちなんだぞ」と言い、ルビオは院議員は「溶接工は哲学専攻出身者よりも稼いでいる」と揶揄する。

A color photograph of a middle-aged man with dark hair and glasses, wearing a pink and white checkered long-sleeved shirt over a white collared shirt, and dark trousers. He is standing outdoors, holding a small, light-colored object in his right hand. The background is a blurred outdoor setting with vertical elements.

うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長「近著に立て直す力」「愛
する意味」。

成できぬ共感的な「ミニ」
ケーションスキル等々だ。そ

自分、子どもの進路を考える
親としての自分、どちらも他
人事ではなく、ズキズキと突
き刺さってきた。

か、リハビリアーツ教育を理工系大学で強力に推し進める

で完全に文系理系に分かれ
る。受験対策としては効率的
だが、それが日本のために、
そして世界のためになるの
が、アーバンノ教育を理

したことであり、大きな後押しをもらった。そしてシリコンバレーラーのトップたちが、自分の子どもたちは理系ゴリゴリの学校ではなく、人間性とりべらルームを涵養する学校に入れているという、その事が何よりも証左だと感得した。

人間や世界 根本を問う教育

る。そしてそれは単なる理想論ではない。今やリベラルアーツ人材がいかにテクノロジー企業や政府・教育組織等で活躍しているかを、幾多の実例を取り上げながら、そしてそこで活躍している文系出身の人たちが、水を得た魚のようにいかに魅力的でイキイキとしているか、その活躍がいかにその企業や組織の成功の中核となっていて、リベラルアーツなしではもはや企業も組織も成り立っていかないかを、比類なきパッションで描き出している。

著者は科学技術の「ハードスキル」ももちろん大切だが、リベラルアーツの「ソフトスキル」がそれ以上に重要な時

期に来たという。そこにはハーデスキルの「民主化」がある。情報科学で顕著だが、昔なら一部の優秀なプログラマだけしかできなかつた仕事が、今や誰でもスマホでできてしまう。科学技術が急速な進展を遂げたおかげで、それがもはや一部のテクノロジーでエリートの手を離れて、一般もそもそも「人間性とは何か」「コミュニケーション」とは何か」「人間にとて、世界にとて善とは何か」といった根本的な問いを中心に据える発想そのものである。

理工系大学の中で斬新な教育改革を断行し、リベラルアーツ教育を強力に推進する立場の人間として、ここに書か

今週の筆者

文化人類学著

*9月10日～10月7日

FUZZY-TECHIE

■ファジー・テック（スコット・ハートリー著 鈴木立哉訳・2019年）
東洋館出版社・1980年
グーグルやフェイスブックに勤めた著者が、今こそ
リベラルアーツが重要な役割を担うと説く。

読書日記

ぼくたちはいつのまにか資本主義以外の社会経済形態があるとは思わなくなってしまつた。

「資本主義の終わりを想像するより世界の終わりを想像する方が簡単だ」

この本にも引用されているアメリカの批評家フレドリック・ジェイムソンの言葉は日本人の大多数が抱く感慨だろう。「共産主義」は独裁、人権弾圧、経済危機等々から無残な死を遂げ、その亡靈の復活を望むものは誰もいない。そして日本の「左翼」はからしあ驚いた! この本に登場する4人の「左派言論人」はみんな異常なほど元気だ。最初から資本主義ありきではなく、彼らは資本主義の根本的な問題点を徹底的に討議する。それはむらやくちや刺激的で、スリリングな議論だ。何で日本の左派はダメなのか。編著者の斎藤幸平氏は、大統領選で旋風を巻き起こした民主党のサンダースや、英労働党のコービン党首らが社会運動に基づいているのに対し、日本の左派は社会運動と切り離され、単なる選挙政治になってしまっているからだという。

ならばその社会運動とは何かを考える際に、第一の対話者の政治学者マイケル・ハ

ートの「コモン」という概念が出发点になる。「コモン」とは民主的に共有されて管理される社会的な富のこと、例えば水や電力がそうだ。地球自身も地球環境もコモノだろ。それは誰かに私有される富では決してない。そしてそれを民主的に管理するた

ートの「コモン」という概念が出发点になる。「コモン」とは民主的に共有されて管理される社会的な富のこと、例えば水や電力がそうだ。地

球自身も地球環境もコモノだろ。それは誰かに私有され化された世界から、民主的に共有される「コモン」へ。そ

ぼくたちはいつのまにか資本主義以外の社会経済形態があるとは思わなくなってしまつた。

「資本主義の終わりを想像するより世界の終わりを想像する方が簡単だ」

この本にも引用されている

アメリカの批評家フレドリック・ジェイムソンの言葉は

日本人の大多数が抱く感慨だ

う。「共産主義」は独裁、人

権弾圧、経済危機等々から無

残な死を遂げ、その亡靈の復

活を望むものは誰もいない。

そして日本の「左翼」はから

しあ驚いた! この本に

登場する4人の「左派言論人」

はみんな異常なほど元気だ。

最初から資本主義ありきでは

なく、彼らは資本主義の根本

的な問題点を徹底的に討議す

る。それはむらやくちや刺激的で、スリリングな議論だ。

何で日本の左派はダメなの

か。編著者の斎藤幸平氏は、

大統領選で旋風を巻き起こし

た民主党のサンダースや、

英労働党のコービン党首らが

社会運動に基づいている

のに対し、日本の左派は社会

運動と切り離され、単なる選

挙政治になってしまっている

からだという。

ならばその社会運動とは何

かを考える際に、第一の対話

者の政治学者マイケル・ハ

筆者

上田紀行さん

*10月8日～11月11日



■ 未来への大分岐（マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、斎藤幸平著・2019年）
副題は「資本主義の終わりか、人間の終焉か？」。
日本の気鋭が、知の最前線にいる世界の3人と対話する。
集英社新書・1,078円

資本主義超えた民主的共有



相対主義は、事実を認めず「それは彼らの見方にしかすぎない」「私の見方は違う」と喝破するトランプ流の「ポスト真実」をもたらしてしまう。そうではなく「正義、平等、自由」といった普遍的な概念の復権が必要だとガブリエルは言う。

第三の対話者の経済ジャーナリスト、ポール・メイソン

は情報テクノロジーに着目する。情報技術によって近未来に家電や住宅までもが安価に提供されるようになる。そして情報もまたコモン化しやすいものであり、それが商品による利益獲得を困難にし、資

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。近著に「立て直す力」「愛する意味」。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。近著に「立て直す力」「愛する意味」。

筆者は上田紀行、西垣通、津村記久子、平田オリザの各氏です。

ばん楽観的でないのが若い世代の斎藤氏であることが身につまされる。日本社会におけるコモン、普遍的なものはあらゆるのか、ひたすら資本主義に切り崩されていくのではないかという大きな危惧があるよう見受けられる。

しかしこの若き政治学者がここまで体を張って世界のビッグネーム3人に肉薄できたのも、その大きな危機感があったのだろう。高校卒業後、アメリカのリベラルアーツカレッジへ、マルクス研究のためにドイツの大学院へ。

日本の大学だったからどうだったのかと考えると複雑な気分にもなるが、まだ30代前半の若き世代にこれだけ大きな構えの議論ができる逸材が生まれたことを頼もしく思う。

本主義を終わらせていく。「コモン」を軸にたいへんな階級を超えた連帯が必須となる。「相対主義」批判とも通底している。文化が違えば、立場が違え全てのものは誰かの所有物で、その所有者の利益の最大化のために使われ、他人は口出しできない、といった分断は違う。だから他人にも他人は違う。だから他人にも他人の見方にも干渉しない。それには一見寛容に見えるが、そのそこにある。その点、いち

本主義を終わらせていく。

「コモン」を軸にたいへん粗い要約となつたが、3人に共通しているのは、ある種の樂觀主義である。資本主義はもはや立ちゆかないところに来ているという確信、そして「普遍的なるもの」への信がそこにある。その点、いち

読書日記

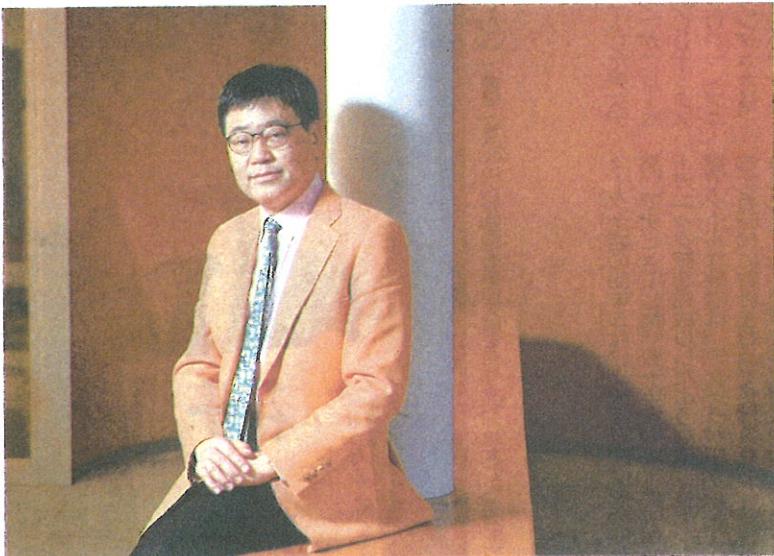
カルロス・ゴーン被告の国外逃亡劇はほんとうに衝撃的だった。大金持ちがさらなる蓄財を画策して逮捕。しかし巨額の逃走費用を用意すればかくも容易に出国できてしまうのか。驚きとともに虚しさを感じさせられる。

脱出先はレバノン。ゴーン被告は両親はレバノン人で、ブラジルで誕生し、初等教育はブラジル、中等教育はレバノン、大学はフランス、勤め先はミシユラン、ルノー、そして日産CEO(最高執行責任者)後に社長として日本へと、まさに世界を股にかけてきた人生だ。

しかしレバノンがどんな国なのか知っている日本人がどれだけいるだろう? 元日本赤軍の岡本公三容疑者の滞在地だけど、岡本容疑者の名前も若い世代の日本人はもう知るまい。

そう思って書店をぶらぶらしていたら、すごい本を見つかけた。「レバノンから来た能楽師の妻」。2019年12月20日発行。うわっ、何なんだこの本は! そしてこのタイミングでの出版とは!

著者はベイルート生まれ。激しい内戦が1年続き、自宅の玄関先にも砲弾が降り注ぐようになり、両親は18歳の娘を国外脱出させることを決意する。道路も空港も閉鎖され、レバノンを、彼女は叔母だと



東京都墨田区で、北山真帆撮影

筆者

上田紀行さん

*12月10日～1月13日



文化人類学者

多様性の力 次代のお手本に

宅にも、マロン派キリスト教徒カトリック、アルメニア正教徒、シーア派イスラム教徒、

スンニ派イスラム教徒の人た

ちが住んでいたという。そん

な多様な人々が共存し、「中

東のパリ」と首都ベイルート

が呼ばれる経済的にも文化的に

も繁栄していた国に、イスラ

エル建国で追われたパレスチ

ナ難民が流入し、政治的な分

断が始まり内戦状態となる。

両親はより安全な学校へと子

どもたちを何回も転校させ、

そして国外に脱出させ……。

至るところでバックグラウ

ンドの違う人と出会い続け

る。新たな環境にぶつかって

いく。どこでも自分が何を求

めているのかの自己主張をし

かう。そしてインターナショ

ナルスクールで同級生の若き

能楽師、梅若猶彦に出会う。

しかし1年の後に大学入学資

格試験のために帰国。その後

イギリスのレディング大に入

学して「コンピューターサイ

ンスを学ぶ。米南カリフォルニアの大

学院に進むがロサ

ンゼルスに合わず、レバノン

に帰国して就職するが内戦で

会社が閉鎖。それで大阪大の

大学院に入学し、ずっと文通

していた梅若猶彦と再会し結

婚。そしてやがてお能の魅力

に取り憑かれ……。

いやあ、この人の地球上の

多様性にも秘密がありそう

だ。アラビア語、フランス語、

英語を日常会話で交ぜて使う

人も多く、著者と同じ集合住

会、そして特に上下関係やし

きたりこだわる伝統芸能の

世界には強い違和感を持つ。

しかしその違和感はそのまま

動線もすごい。普通の日本人

から見れば波瀾万丈の人生に

見えるけど、がんばり屋の主

人は壁にぶつかりながらも

幾多の困難を超えていく。

それはレバノンという国

の動線もすごい。普通の日本人

から見れば波瀟万丈の人生に

見えるけど、がんばり屋の主

人は壁にぶつかりながらも

幾多の困難を超えていく。

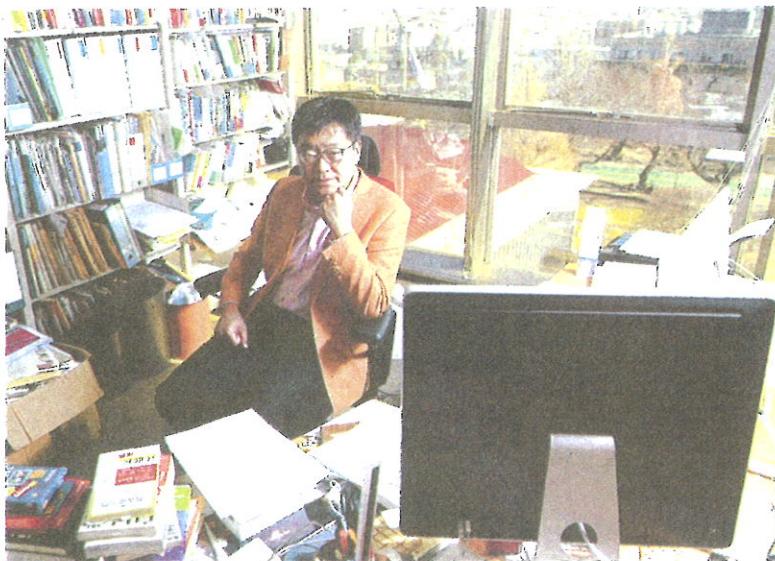
それはレバノンという国

読書日記

カルロス・ゴーン、IR汚職……、久しく聞いていたが、ついに東京地検特捜部という名前が急に復活したように思つたのはほんただろうか。ロッキード事件、リクルート事件、ゼネコン汚職、大蔵省のノーパンしやぶしやぶ接待……、「特捜」という名は日本社会の「巨悪」を暴き、大きな衝撃とともにその時代の強烈な記憶を残してきた。

その特捜が発表した平成時代の重大事件の真相を、敏腕検事であり、後に特捜部長となつた熊崎勝彦氏が、元NHK記者、解説委員で「週刊ごどもニュース」で池上彰氏の後の2代目お父さんでもある鎌田靖氏を聞き手として語り下ろしたのが本書だ。

われわれ国民にとって、多くの事件は首謀者の逮捕とか家宅捜索で初めて知ることになる。しかしそこに至るまでに特捜部では何が行われているのか。その物語はまさにドラマだ。ある日かつての特捜同僚検事が「こんなのあるよ」と2、3枚のメモを持ってくる。他の事件を内偵している時なのであらまじめにかけず本立てにはさんでおくが、その担当案件がなかなか進まず、「あれ、この前メモがあつたな」と見ると、直感的に「これ面白いじゃないか」とひらめく。丸紅の有力社員が辞めている。綿密に調べていた



――東京都墨田区で、北山夏帆撮影
うえだ。のりゆき 東京工業大学ベラルアルツ研究教育院長。近著に「愛する意味」「立派です」。

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの各氏です。

が巻き起こったら、もうお父さんは検事を辞めて、田舎に帰つて弁護士やるから、そういう準備とだけ」。そしてホテルの一室で巨大政治家に対する脱税の供述を得る。自分で運命を賭した一世一代の勝負の瞬間がそこかしこに現れるのだ。

重大事件の真相はそれ自体が必読だ。しかしこの本の本領は、その中に見え隠れする人生訓、そして強い意志だ。かつての特捜部長であり検事総長の吉永祐介氏は特捜の仕事は「ドバさない」と言つ

つ。しかし巨悪に対しても決してひるまない。政治家であろうと、大蔵省であろうと、大抵の政治家は敵であり味方でもある。深夜2時(+)に「明日の逮捕情報、朝刊で抜きます」と宿舎に来た記者に告げられて「生涯出入り禁止だ!」と激怒する。しかしがつては検事も記者も「正義」のために働いていたのだ。熊崎氏からも鎌田氏からもその思いが切々と伝わってくる。

この本は懐メロではない。若者にこそ読んでほしい。そんな柄では全然ないけれど、ぼくも若い頃読んでしまったのだと、熊崎氏からも鎌田氏からもその思いが切々と伝わってくる。

うえだ。のりゆき 東京工業大学ベラルアルツ研究教育院長。近著に「愛する意味」「立派です」。

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの各氏です。

筆者

上田紀行さん

*1月14日～2月17日

平成重大事件の深層
高崎勝彦

著者

■伝説の特捜検事が語る 平成重大事件の深層
鎌田靖著・2020年)

中公新書ラクレ・1078円

た。東京地検特捜部長などを歴任した元特捜検事が、自ら携わった著名事件の捜査の裏側を語る。

「正義」のため働いた熱い思い

と共和という企業との架空取引で数十億円騙し取ったことが分かつてくる。詐欺事件として逮捕するが、政治家の関与がにおいてくる。そして億を超える額が北海道・沖縄開発庁長官に渡ったとの供述が取れ、その裏を取り、大臣はタクシー代は自腹で給料が連日連夜の残業で、當時はタクシー代は自腹で給料がタクシー代に消えていく。家族には迷惑をかけながらも、それでも一心に追いつめてい

から大臣の逮捕に至る過程は、知的な興奮に満ち満ちている。本人に聴取しなければならぬ。その前日に熊崎氏は官邸近くのレストランで家族に逮捕されたとなつたら、お父さんはうまくいったものと思え」「もしかん批判の渦

く執念はすごい。金丸信元自民党副総裁の巨額脱税事件は、外堀を埋めたが最終的には本人に聴取しなければならない。その前日に熊崎氏は官邸近くのレストランで家族に逮捕されたとなつたら、お父さんが逮捕されたとなつたら、お父さんはうまくいったものと思え」「もしかん批判の渦

た。経済や社会は前に進むが、後ろのほうでドロ、埃が溜まつてくる。それを掃除してきれいにするのが特捜なのだと。その当事者意識、プロ意識を熊崎氏は何回も強調する。そして「いかなる人も真実に対しては頭を垂れよ」と。捜査に間違いがあると考えたら潔く退く勇気を持

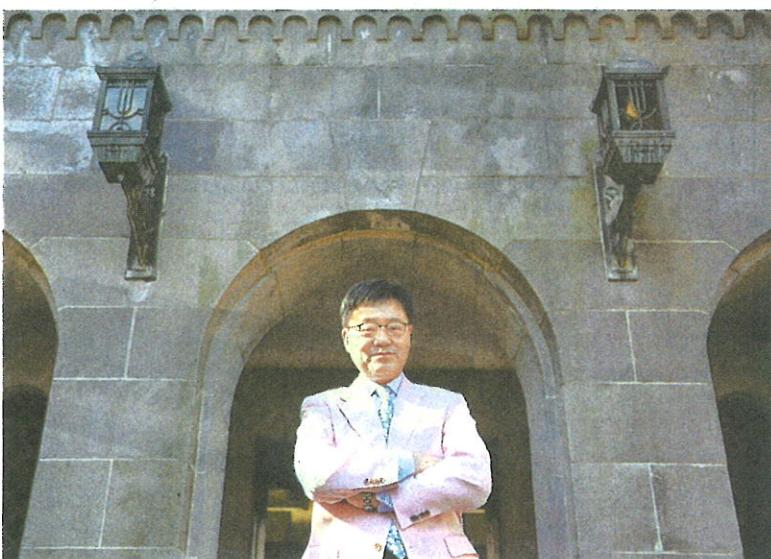
読書日記

世の中コロナウイルス一色だ。今後全世界で数十万、いや数百万人にもなるかと推計されている死者数、世界恐慌の可能性、日常生活も教育現場も大混乱だ。

普通の風邪から、ノロウイルス等々の感染症、毎年のインフルエンザ流行に加えて、2002年にはSARSが、09年には新型インフルエンザが大流行と、ウイルスはもはやわれわれの人生に大きな影響を与える。世界の主要な構成物だ。しかしあれわれはどうまでウイルスの何たるかを認識しているだろうか。

そこで手に取ったこの本「ウイルスは生きている」、そもそもこの題名で「おおっ！」と思えるのはけっこくなウイルス「通」なのかもしない。多くの人たちはウイルスは当然生きていると思っている。くしゃみをするときばい菌が飛んでくる。感染者が触ったものにばい菌が付き、それを自分も触ると……。

でも「ばい菌」とウイルスは全然違う。細菌や真菌は「細胞」を持っていて、自己増殖ができる「生物」だが、ウイルスはDNAやRNAが膜で覆われたもので自己増殖できない。だからウイルスは「生物」ではなくて「物質」だ、というのが、かつての多くの生物学者たちの見解だった。



うえだ・のりゆき 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長。2月に編著「新・大学でなにを学ぶか」を刊行した。

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの各氏です。

今週の筆者は

上田紀行さん

*2月18日～3月16日

文化人類学者

ウイルスと生命の不思議

ならばウイルスはなぜ増殖できるのかといえば、生物の細胞に侵入し、その細胞のDNAにウイルスの遺伝子情報を転写して増殖する。そして遺伝子情報が毒素を生成されるものであれば、その宿主に多大な障害を与える。それが様々な病原性ウイルスである。

となるとウイルスとは外部から侵入する遺伝子情報「物質」ということになるのだが、しかしその「外部」から持ち込まれた遺伝子は内部に留まり続け、その生物の本質的な機能を担うこともあるからややこしい。例えば人の胎盤を果たすシンシンチンというタンパク質はウイルス由来の遺伝子によるものなのだと云う。つまりウイルスに「感染」

だ。母親と胎児の血液型が異なっていても胎盤の「合胞体性栄養膜」という特殊な膜のなかで母子は共存できる。おかげで母子は共生できる。

ところがこの膜で重要な役割を果たすシンシンチンというタンパク質はウイルス由来の遺伝子によるものなのだと云う。「考えて」もらうには数年かかりそうだ。



■ウイルスは生きている（中屋敷均著・2016年）
講談社現代新書・924円
細胞機能構造学の大学教授がウイルスとヒトとの世にも不思議な物語を語る。ウイルスとは何者が、ヒトとは何者か。生命的根源を問うていく。

していなければ哺乳類の人も生まれていなかったのだ！

胎盤といふ人間にとっていちばん本質的な部分でウイルスは「生きている」のである。

ヒトに限らず、全ての生物においてウイルス由来の遺伝子は多く、そのウイルスが宿主と合体して双方に益する賢い生存戦略を取っているのような自覚ましい例もたくさん挙げられている。

これまでパンデミックを引き起きたウイルスには、時間とともに毒性が弱まっていくという性質がある。これは人間側の耐性ができたことも

実はぼくが最初理系で大学に入ったのも、高校が遺伝子生物学の実験校で、バクテリオファージというウイルスのDNAを大腸菌に送り込んで、大腸菌の性質を変えると、その不思議さに自覚めたことも一因だった。あの若き日の実験とコロナウイルスの大流行はつながってる……。

ウイルスと生命の不思議を、細かい生物学知に触れつづいていざいと引きこむストーリーで、その不思議さに自覚めたことも一因だった。あの若き日の実験とコロナウイルスの大流行はつながってる……。

ウイルスと生命の不思議を、細かい生物学知に触れつづけて、その不思議さに自覚めた。入学式も中止し、4月からの講義をすべてネットでの遠隔講義に、大学で日々対面に追われているのも、既にウイルスの戦略に取り込まれているのかもしれない。

読書日記

先月「ウイルス論を取り上げてから1ヶ月、世界がさらなる危機へと向かっている中での『読書日記』は気が重い。しかしこの時期だからこそ、今は石弘之著『感染症の世界史』を読んでみる。

人類はウイルス由来の遺伝的形質を多く有しており、それが人類の生体機能の本質的な部分も担っている。

しかし採集狩猟時代のように、小集団が孤立して生活する社会ではパンデミックは起きなかつた。世界的なパンデミックが発生するのは農耕が始まつて定住生活となつてからだ。13世紀のハンセン病、14世紀のペスト、16世紀の梅毒、17～18世紀の天然痘、19世紀のコレラと結核、そして20～21世紀のインフルエンザとエイズなど、世紀ごとに人類はパンデミックを経験してきた。

もちろんそれが激化するにつれてからである。都市の過密社会は衛生状態の悪化も生み、特に産業革命下のイギリスやヨーロッパではコレラが猛威をふるつた。日本でも明治12（1879）年と19年に

先月ウイルス論を取り上げてから1ヶ月、世界がさらなる危機へと向かっている中の『読書日記』は気が重い。しかしこの時期だからこそ、今は石弘之著『感染症の世界史』を読んでみる。

すべての動物は感染症とともに生きている。だから人類は生まれたそのときから感染症と付き合ってきた。それどころか先月の「ウイルスは生きている」にもあったように、

人間はウイルス由来の遺伝的形質を多く有しており、それが

人間の生活圏に出現し、それを

クロード交易により、西からもたらされた天然痘やはしか

の流行で人口6000万人超の漢は4500万人まで減少

したたく間に広がり、世界的な

パンデミックとなる。この本で目が開かれたのは、現代の新興感染症が熱帯

されたペストでローマ帝国は多数の死者を出し、その後もヨーロッパはペストの流行に

苦しみことになる。そして人が瞬時に移動できるようになつた現代では当然感染症はまたたく間に広がり、世界的な

パンデミックとなる。この本で目が開かれたのは、現代の新興感染症が熱帯

林の破壊という環境問題が生みだしているものだといふことだ。感染症は古来、動物由来のものが多いが、特に現代の熱帯林の大規模破壊と集落の急膨張ですから動物が人の生活圏に出現し、そ

れらと接触したり食用にしたりすることから人間が感染し、それらがまたたく間に大

疫病なのだ。

高度な科学技術の発展で人類は感染症に勝利する、そう信じられた時代があった。し

かし現代文明は同時に強力な感染症を発生させる環境も生みだしている。環境破壊とい

う形で強力にアクセルを踏みながら、さらに強いブレーキを開發しようとする。しかし

抗生物質は次々と耐性菌を生みだし、新しいアクセルを生みだす。それらはエンジンレス

な戦いであり、決して終わることはないだろうというのが本書の結論だ。

それに加えて、日本には「経済優先」という強大なアクセルも存在する。感染症は実は現代文明の現代社会の矛盾を映し出す鏡なのだ。新型コロナウイルス禍が問うているのは、医学的対策以上に、何を求めて生きるのかというわれわれ自身の姿なのかもしない。

筆者
今週の筆者

文化人類学者
上田紀行さん

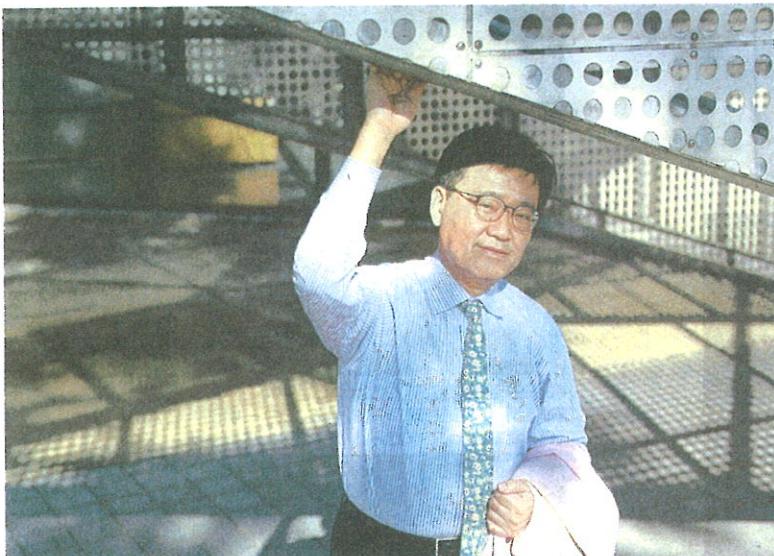
*3月17日～4月13日

感染症の
世界史

■感染症の世界史（石弘之著・2018年）

角川ソフィア文庫・1188円

ウイルスや細菌が引き起こす感染症と人類の関係を、地球環境史の視点から探る。近年、問題となつてゐる風疹など、日本における感染症にも触れられる。



II 東京都墨田区で、北山夏帆撮影

現代の矛盾を映し出す鏡

都市に到達し、世界規模の感染となる。

エボラ出血熱はアフリカの熱帯林に住むコウモリがはじつて落とした果実を食べただゴリラなどの靈長類が感染し、それを食べた人間に感染した。感染地のアフリカでは中国などの投資で熱帯林が大規模に開発されており、それが

群衆も新型コロナウイルスも

食用動物からの感染が疑われ

ている。

となると感染症は天から降つて湧いた災いではなく、人

うえだ・のりゆき 東京工業大学ベラルーン研究教育院長。近著に「立て直す力」「新

・大学でなにを学ぶか」。

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの各氏です。

讀書日記

しかし読み始めると抜群に面白い。京大で臨床心理学の博士号を取った若者は、普通は大学への就職を目指すところ、いや自分は実際のカウンセリング、セリング、心理療法の場で働くのがしたいのだと、沖縄の精神科診療所に就職する。しかし飛び込んだデイケアの世界では、彼の期待とは異なり、自分の学んできた技量がまったく役に立たないところだった……。



II 東京都目黒区で、北山夏帆撮影

ウイルス対策や遠隔講義の準備で、いつもの年の10倍くらい仕事をしつつ、新入生や新任教員の歓迎会もできず、やはり何か気が晴れない中、これも遠隔での上田研究室のゼミで院生に「このごろ読んでも面白かった本は何?」と聞いて推薦されたのがこの本だ。でもよりによつてこのタイトルが「居るのはつらいよ」とつづって……。

緊急事態宣言下で一方力遅
れで大学の講義が始まつた。
学生は登校せず、すべて遠隔
講義だ。新入生の中には、実
際に大学を見たのは入試の日
だけという学生もいるだろ
う。彼らにとつての大学とは
丘の上に建つキャンパスでは
なくネット空間かと思つと、
不思議な気分になる。

ら、ユーモア溢れる伝説小説のようすに語られていく。「坊っちゃん」と違って、登場人物は全員善人なのだけれど、そのキャラ立ちはすごい。もつとも研究倫理上、実話をそのまま書けるわけはないので、そもそもがエッジを利かせて脚色されたキャラなのかもしないけれど。

それにしてもカウンセラーにとって、はたから見るとほとんど同業に見えるデイケアのどこが異世界なのか。それは心理療法、セラピーが「する」ことであるのに対し、ケアは「居る」ことであり、まったく違うことなのだ。セラピーは患者さんの心の傷に向かい合い、自己や無意識と深

く関わる中で、変化を与えていこうとするという「する」行為だ。ところがディケアはそうじゃない。変化のない「居場所」作りのほうが大切なのだ。日常の場での居づらさを抱えて患者さんたちはディケアに来ている。だからまずは「居ること」。一日中タバコを吸っていてもよい。ゲ

いく。だから患者さんが疲れたり、飴飴をあげたりしてケアすることはもある。依存は恥ではない。とんがつた個性を持ちながら大きな弱点も持つ人たちが、互いに依存し合える場こそが、良きケアの場なのである。

「ただ、そこに居られる」こと

「ムをやったり、球技をやったり、著者からすれば「どうが治療行為なのか?」といふへんに、「変わらぬ毎日」こそがケアなのである。

(というキャラク設定でもある)のだろう。の出会いと成長の物語は、あったかく、切なく、ホロリとさせられる。悪しきケアビジネスへの警鐘もある、哲学的思索もふんだんにありながら、実に人間味溢れる本だった。

■居るのはつらいよ（東畠開人著・2019年）
医学書院・2200円
副題は「ケアとセラピーについての覚書」。若き臨床心理学の博士が、沖縄の精神科クリニックで一癖二癖ある人々と交わり、「いる」とことの尊さを知る物語。

筆者
文化人類学者
上田紀行さん
*4月14日

上田紅行さん

*4月14日～5月18日

うえだ・のりゆき 東京工業
大リベラルアーツ研究教育院
長。著書に「生きる意味」「立
て直す力」など。

読書日記

世の中「緩和」の流れとなり、大学の遠隔講義も予想以上に順調に進んでホッとしている。しかしドッと疲れている自分に気づく。3月以来毎日新型コロナ報道を見ざるを得ず、今日は感染者何人、緊急事態宣言下での行動規制レベルは……と日々変動する状況に神経が常に苛立つている。日本精神衛生学会のメッセージに「最新の情報を確かめたいのは当然ですが、感染者数などの情報に繰り返しされると、心が少しづつ傷んできて、イライラや不安が生じてきます」とあるが、まさにそれだ。

そんなときには何か「ずっと変わらぬもの」を読みたくなる。となれば古典だ。とはいえ氣むすかしい言葉は滅入ってしまいそうで無理だ。どう手に取ったのが「一億三千万人のための『論語』教室」。高橋源一郎さん訳の「論語」だ。

大正解だった!

「論語」って、超有名な部分は誰でも知ってるけど、全部は読まないでしょ。ありがたくはあるけれど、しかつめらしい「君子」のお言葉。ところが読み始めるど、冒頭からそんなイメージがぶつ飛ぶ。△子曰く、「学んで時に之を習う。亦た悦ばしからずや。朋友あり、遠方より来る。亦た

樂しからずや。人知らずして僵おらず。亦た君子ならず。ヘンセイはこうおっしゃいます。／「いくつになっても勉強するのはいいのですよね。みんなでこの教室に集まつて一緒に勉強してる時は特に楽しいですね。だってひとりじやセンセイだってつまらないで生きてください。そ

今週の筆者

上田紀行さん

*5月19日～6月15日

文化人類学者

気ままな孔子 コロナ疲れに

それでいいんです」▽

いやあ、孔子センセイ、な

んて人間的な人なんだろう。

そしてこのコロナ状況下にな

んて沁みる言葉なんだ、と心

をぐつつかまれる。

そして読み進めてみると、

論語というのはこの「學び舎」

の雰囲気を活写したものなん

ですね。センセイ、けっこう

勝手気ままにお弟子さんたち

とか政治家の論評とともにち

ゃって、言いたい放題。しか

しそこにググッ！と来る言葉

が時々襲来する。

△魯の君主、哀公がセンセ

イにこんな質問をした。「ど

うしたら、国民に政府を信頼

んばれ佛教！」など。

うえだ。のりゆき 東京工業大学ベラルアーツ研究教育院長。著書に「立て直す力」「がんばれ佛教！」など。

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの名氏です。

一億三千万人のための
「論語」教室
高橋源一郎

■一億三千万人のための『論語』教室（高橋源一郎著・2019年）ある編集部から翻訳を持ちかけられ、著者は「論語」に向き合うことになりました。本書を「孔子先生の教室」に「十年通つている間に、ぼくが作ったノート」と言う。

ある編集部から翻訳を持ちかけられ、著者は「論語」に向き合つた。「いくつになつても勉強するのはいいのですよね。みんなでこの教室に集まつて一緒に勉強してる時は特に楽しいですね。だってひとりじやセンセイだってつまらないで生きてください。そ

うです。それと同じで、友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

て「あんた誰？」とかいわれ

たりするとムカツいて、クソ

りじやセンセイだつてつまら

ないですよ。それと同じで、

友だちが遠くからわざわざ話

に来てくれるのも嬉しいで

すよねえ。みんなもそうでし

え。みんなは、そんなこと

で腹を立てるような人になら

うと、はっきりこうおっしゃ

った。「よくお聞きください。

大切なことは、行政のトップ

にウソをつかない人を置くこ

とです。そうすれば、黙つて

いても寂しいですね。でも、

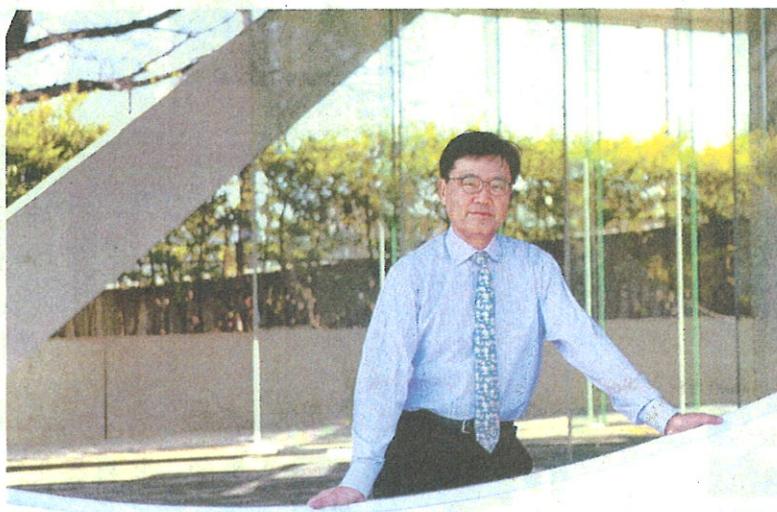
その代わり誰かに会つてその

人が自分をぜんぜん知らなく

読書日記

新型コロナウイルスを巡る状況も持久戦となり、1日8時間以上もパソコンの前に座りっぱなしで講義と会議などという日も続いて、神経がかなり消耗してきた。「こういう時はアートなのでは」とひらめき、「13歳からのアート思考」という書名に、おじさんもフレッシュになるかもと手に取ったのがこの本。

でも「このところ美術館に行けてないし、アートの雰囲気にちょっと浸りたいな……」くらいで読み始める。最初から頭をぶん殴られる。作品をじっくりと鑑賞しないでアートと向き合つてると誤解してるのは、「自分なりのものの見方・考え方」などとはほど遠いところで、物事の表面だけを撫でてわかった気になり、大事なことを素通りしてしまっている。ようやく、厳しい。そのことは、果たしてなにかを生み出したりできるでしょうか?」とたたみ込まれてしまう。うわっ、厳しい。そのことはほくが大学で常々学生に言っていることなのだけど、アートでそれを言われるとは思わない。ぼくたちは「美術作品」がアートだと思っている。で



東京都目黒区で、北山夏帆撮影

うえだ・のりゆき 東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院 長。著書に「愛する意味」「立て直す力」など。

多くの人たちの「アート」観は大転換させられるに違いない。ぼくたちは「美術作品」

なかった!

そんなふうに、自分の「見方」をつくれない人が、激動する複雑な現実世界のなかで、果たしてなにかを生み出したりできるでしょうか?」とたたみ込まれてしまう。うわっ、厳しい。そのことはほくが大学で常々学生に言っていることなのだけど、アートでそれを言われるとは思わない。ぼくたちは「美術作品」

なかった!

筆者は上田紀行、西垣通、島本理生、平田オリザの各氏です。

文化人類学者 上田紀行さん

*6月16日～7月13日

筆者は
今週の

自分の問い 探究して花を

もそれはタンポポと言われて、タンポポの花だけを思い浮かべること似ている。う。1年に1週間しか咲かない花よりも、地下の根が大切だ。そこには興味や好奇心や疑問の種があり、そこから無数の根が生えている。それは「探究」の根。花がアートなのでではなく、この「探究」こ

そがアートであり、その探究に人生を懸ける人がアーティストなのだ。でも世の中にはその探究の根がないのに、花だけ作る人がいる。それを筆者は「花職人」と読んでいる。他人が定めたゴールに従つて手を動かしているだけの人。それはアーティストじゃない。うーん、

厳しいけど、すぐ納得する。じゃあ実際にアーティストはどうな探究をしているのか。時に課題も出たりしながら、紙上ワークショップ型の講義が始まる。そして20世紀のアーティスト6人が登場。マティス、ピカソ、カンディンスキイ、デュシャン、ポロック、ウォーホル……。海外

もアーティストになれるよ。自分の疑問や問い合わせ探究しよう。「自分の愛すること」を軸にしていれば、目の前荒波に飲み込まれず、何回でも立ち直り、「表現の花」を咲かせることができるのはどうです」。うーん、最近のぼくの著作もこの路線なので、ここまで言い切られると、泣かさ

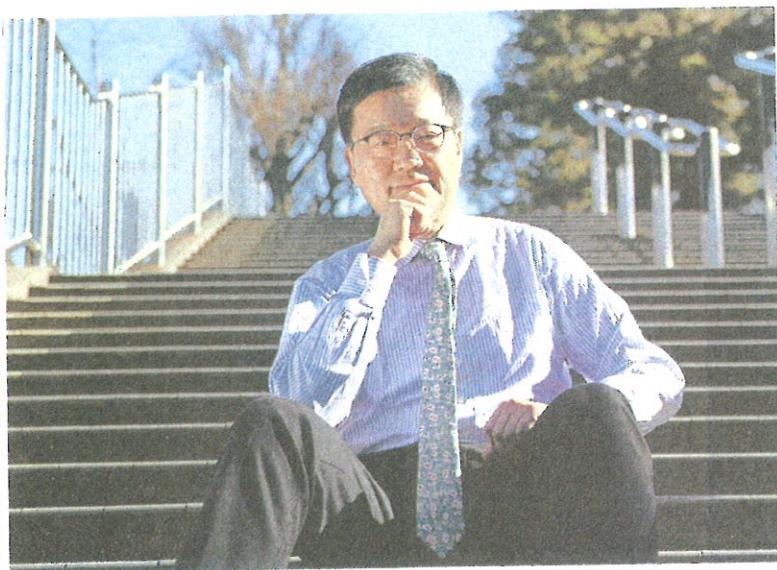
■「自分が答え」が見つかる 13歳からのアート思考 (末永幸歩著・2020年) ダイヤモンド社・1980円 美術教師である著者が、アートの本質を取り扱って講義。「ものの見方」への気づきを与える。

にいると必ず美術館を訪ねてしまふぼくにはおなじみの人たちだが、これまで何となく感じていたことがものすごく明確化されて、目から鱗だ。ひとりひとりがそれまでの「アート」観のどこに疑問を持ち、それをどのようにぶつ壊し、新しい地平を得ていったのかなるほど!「ーと、むちゃくちゃスッキリする。あ、解答を知つてスッキリみたいたい方は、この本がむしろ否定しているところだけど。

そう、この本はスッキリするための本ではない。みんなこのごろ美術館に行けないので、何かアートっぽい本をと手に取つたけど、何でぼくは美術館に行き続けてきたのか、人生を振り返り、それは探求だったんだ!と背中を押され、コロナの閉塞感なんか負けないぞーーとおじさんを勇気づけてくれる本なのだった。

讀書日記

民間の研究所などを除けば、「研究」は大学でやるものだと思われている。だからこの「在野研究ヒガーネス」にはじめる「大学に属して見つけ、帯の「大学に属してませんけど、なにか?」といふ文句にぐぐっときた。



東京都写真で、北山夏帆撮影

大学に属している研究者の履歴が、大学卒業、大学院卒業、学位取得、ポスドク、就職……と、実にドラマがないのに対し、「在野研究者」の履歴は抜群に面白い。編著者ぶかなど。

年を迎えるは、在野の研究者となり、その純朴さを取り戻せるだろうか。いや、かなりの時間を会議や調整業務に取られている今の状況は、すでに週末研究者なのだけど。

て週末学者になろうと思つ
熊沢辰徳氏は大学院まで生物学を修めたが、そこで研究テーマとは関係ないハエに魅せられ、一般企業に勤めながらウェブページでハエの研究成果を発信していたら、ハエ研究の世界的権威のロシア人からメールが来て共同研究が始まり……。

「雑用が多くてねえ」とは
り様になつてしまふのだ。
業にしてしまうと、そんな有
権威的な組織の中で学問を職
業としてしまうと、そんな有
親会で偉い老教授の周りを
悪い風景は、かつてはどこに
でもあつたし、今だって代わ
り映えのしない学会もある。

太学って何だろ。会議も講義も遠隔で、同僚教員も学生にモリアルに会えず、前期が終わつた。キャンパスにまだ一度も入れてない今年の新入生の大学のイメージも去年の新入生とは全然違つうだ。遠隔講義にもいいところはたくさんあるが、やっぱり学生と会つてなんぼのものだと思つてしまふ自分がいる。

いえば、柳田國男だって農商務省から貴族院書記官長まで務めた官僚だった。しかしそんな旧き良き時代はどうの昔に失われているはずだ。

なったのか。酒井大輔氏は公務員となつたが週末の時間を保持してあまし退屈で仕方がない。大学時代のように読書にいそしむうちに、政治研究へと導かれ、中央官庁への転勤後も激務の間にインターネット調査を行う。伊藤未明氏は体調を崩して勤務先を35歳で退

職し、「また留学でもするか」と思う。既にMBAと工学修了身を持ち、留学相談で「まだ、勉強したいんですか?」と言われ、「そうだ俺は学者になりたいんだ」と気付いて英國に留学するが、帰国して39歳からの5年の博士論文又筆はしんどく、ならば就職し

の荒木優太氏のように、実家に住んで経費節減、早朝の清掃アルバイトをして、日本文学研究を電子書籍や紙でも自己出版し続け、この本の編者になってしまふなんていうのも、すごくかっこいい。かっこいいと言えば、オープンな学びの場を創出していの逆差

研究の純粹な喜びを在野で

*7月14日～8月10日

在野研究 ビギナーズ

■在野研究ビギナーズ——勝手にはじめる研究生生活（荒木優太編著・2019年）

明石書店・1980円